

法政大学現代福祉学部

2023年度 海外研修報告書

B団（2023年9月2日～9月10日）



2 0 2 3 年度 法政大学現代福祉学部海外研修

B 団

研修報告書

団長・副団長挨拶

2023 年度 海外研修団長 藤本 千世
副団長 松村 菜々

今年度の団長・副団長を務めさせていただいた、藤本と松村です。私たち 18 人の研修生は 2 年生、3 年生、4 年生が学年を超えて事前学習やガイダンスを行い、9 月 2 日から 9 月 10 日までの 8 日間スウェーデンを訪問しました。2019 年度までは 2 年生を対象として募集をかけていました。しかし、コロナウイルスの影響により中止にせざるを得なかった 2020、2021、2022 年度海外研修。もちろん、応募すること以前に大学講義もオンラインばかりの大学生活だった 3 年生、4 年生はとてもやるせない気持ちだったでしょう。そんな私たちの気持ちに先生方は寄り添ってくださり、今年のみ 3 年生、4 年生も募集対象とし、海外研修に参加させていただきました。先生方や多くの人の支えがあって、約三年ぶりに現代福祉学部海外研修を実現することができました。この機会をくださった現代福祉学部事務課の皆様、学部長、先生方、引率してくださった図司先生と小田先生にこの場を借りて心から感謝を申し上げます。海外研修初となる、学年を超えたスウェーデンでの学びをこの報告書を通じて感じていただければと思います。

私たちは 6 月から事前学習やガイダンスを行いました。スウェーデンについてあまり知らなかった私たちは、グループ活動や現地ガイドさんが行ってくださった講義を通してスウェーデンについて学びを深めました。また、研修中の安全面に関しても添乗員さんから事前に学びました。コロナ禍で日本どころか家から出ることすら許されていなかった時期も長かったため、多くの 2 年生は「日本を出る」ということが初めての学生もいました。多くの方の支えにより、事前学習で研修中の注意点や心構え、「私たちは何を学びたいか」を各々明確にし、研修を実りあるものにできたと思っています。

実際にスウェーデンに着いてからは、感動と学びが日常の中に至る所に転がっており、日々学生たちが必死にメモを取る様子や写真に収める様子がこの報告書からもご覧いただけるかと思います。「福祉大国スウェーデン」に行ったことで、多くの学生が自分の国の福祉について、将来について考えるきっかけになったのではないかと思います。私たちが実際に五感を通して学んだことを少しでも感じてもらえたら幸いです。そして、誰か一人でも「来年は海外研修に応募してみようかな」と一歩を踏み出してくれる学生がいれば、きっと日本の福祉の未来も明るくなると思います。

最後に、この研修の実現と成功にご尽力していただいた旅行代理店の皆様、学校関係者、保護者の方々に研修生一同、心より感謝申し上げます。そして、改めて現地ガイドのエミルさんに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

B 団 参加者

○ 4 年生

20J0404 福祉コミュニティ学科	木村 優花
20J0603 福祉コミュニティ学科	大高 達彦
20J1109 福祉コミュニティ学科	松村 菜々

○ 3 年生

20J0211 福祉コミュニティ学科	藤本 千世
21J0912 福祉コミュニティ学科	渡辺 幸也

○ 2 年生

22J0301 福祉コミュニティ学科	青木 杏美花
22J0404 福祉コミュニティ学科	加藤 なつみ
22J0802 福祉コミュニティ学科	衛藤 和瑚
22J0906 福祉コミュニティ学科	亀田 萌葉
22J2204 臨床心理学科	長尾 紗希
22J2206 臨床心理学科	山田 光理
22J2304 臨床心理学科	田村 梨乃
22J2502 臨床心理学科	清水 のどか
22J2505 臨床心理学科	中村 優光
22J2606 臨床心理学科	高松 さつき
22J2802 臨床心理学科	北久保 諒美
22J2901 臨床心理学科	石井 莉愛
22J2903 臨床心理学科	河野 有咲

○ 引率教員

現代福祉学部

福祉コミュニティ学科 教授	図司 直也
---------------	-------

現代福祉学部

臨床心理学科	助教	小田 友理恵
--------	----	--------



3 列目（左→右）

図司直也先生 エミルさん 衛藤和瑚 長尾紗希

亀田萌葉 田村梨乃 中村優光

2 列目（左→右）

大高達彦 藤本千世 北久保諒美 河野有咲 木村優花 青木杏美花

1 列目（左→右）

小田友理恵先生 加藤なつみ 高松さつき 清水のどか 松村菜々 山田光理 石井莉愛

視察プログラム

9月2日（土） 0日目

20:30 羽田空港 第3ターミナル 集合

9月3日（日） 1日目

00:05 空路、ドバイへ

05:45（現地時間） ドバイ国際空港 到着

08:40 空路、ストックホルムへ

13:45（現地時間） スtockホルム アーランダ国際空港 到着

9月4日（月） 2日目

08:15 専用バスにて視察先へ出発

09:00-11:00 ブロンマ地区 行政オフィス 訪問
Stockholm city Bromma District

11:30-12:30 昼食（Bromma District 担当者の方々とレストランにて）

～公共交通機関にて移動～

13:30-15:00 ブロンマ地区 ハビリテーションセンター 訪問
Habiliteringscenter Brommaplan Vuxna

9月5日（火） 3日目

08:00 専用バスにて視察先へ出発

09:00-11:00 アーランダ地区 障がい者向け高等学校 訪問
Arlanda gymnasium

11:15-12:15 昼食

～公共交通機関にて移動～

14:00-16:00 カロリンスカ大学病院内 アストリッド小児病棟 訪問
Astrid Lindgren Childrens Hospital

17:00-18:00 ストックホルム大学生によるキャンパスツアー
Stockholm University

18:30-21:00 ストックホルム大学生と交流&夕食

9月6日（水） 4日目

終日 ストックホルム市内 自由研修

9月7日（木） 5日目

08:00 公共交通機関にて視察先へ出発

09:00-11:00 ハンマルビー ショースタッドにおける都市開発 視察
Hammarby Sjöstad

11:30-12:30 昼食
(障がいを持つ方が働くレストラン Himmel och Pannkaka にて)

～公共交通機関にて移動～

13:00-15:00 ストックホルム市内 プレスクール 訪問

Förskolan Tullstugan

9月8日（金） 6日目

08:00 専用バスにて視察先へ出発

09:00-11:00 小中学校 訪問
Grimstaskolan

～昼食 （Grimstaskolan にて給食）～

14:00-15:00 臨床心理士 訪問
医療センター Bup

9月9日（土） 7日目

11:00 頃 専用バスにてストックホルム アーランダ国際空港へ出発

15:25 空路、ドバイへ

9月10日（日） 8日目

00:05（現地時間） ドバイ国際空港 到着

02:40 空路、成田空港へ

17:35 成田空港 到着

ブロンマ地区 行政オフィス
Stockholm city Bromma District



ブロンマ地区 ハビリテーションセンター
Habiliteringscenter Brommaplan Vuxna



アーランダ地区 障がい者向け高等学校
Arlanda gymnasium



カロリンスカ大学病院内 アストリッド小児病棟
Astrid Lindgren Childrens Hospital



ストックホルム大学生によるキャンパスツアー
Stockholm University



ストックホルム大学生との交流&夕食



ストックホルム市内 自由研修



ハンマルビー ショースタッドにおける都市開発
Hammarby Sjöstad



障がいを持つ方が働くレストラン
Himmel och Pannkaka



ストックホルム市内 プレスクール
Förskolan Tullstugan



小中学校 Grimstaskolan



医療センターBUP



事前学習内容・現地訪問先での学びや感想

1 班 [福祉行政、都市開発]

青木杏美花 加藤なつみ 河野有咲

2 班 [プレスクール]

木村優花 大高達彦 衛藤和瑚 長尾紗希 北久保諒美

3 班 [精神分野、病児教育、小中学校教育]

高松さつき 亀田萌葉 山田光理 清水のどか 中村優光

4 班 [障害分野]

藤本千世 松村菜々 田村梨乃 石井莉愛

福祉行政

河野有咲

○事前学習内容

まず、政策などの話をする前に、スウェーデンの行政のシステムについて説明していきたいと思います。

スウェーデンの地方行政は、21 のランスティング（Landsting）と 290 のコミューン（Kommuns）によって担われています。コミューンとは、概ね日本の市町村に相当する基礎的自治体で、その所管する事務の範囲は多岐に涉ります。対して、ランスティングは日本の県に相当するもので、複数のコミューンを含む、より広域的な自治体です。そして、所管する事務はコミューンに比べて種類が少ないです。ちなみに、コミューンとランスティングは、それぞれ所管する地域の広さと人口規模によって行政事務を分担している対等な関係の地方自治体であって、ランスティングはコミューンの上位団体ではありません。

具体的な担当事務としては、ランスティングでは主として医療を担っています。また、コミューンでは、教育と福祉をメインに、雇用、インフラ整備、文化などを担っています。なお、国は社会の発展とナショナルミニマムの保障を担当します。議会と内閣が地方自治体の事業について法的経済的な枠組みを設定したり、各分野での目標、指針を示したりして、県と市町村はそれに沿って一般権限と特別法に基づき事業を実施することになります。また、ストックホルム市は大都市であるため、地区委員会と呼ばれる、市域をさらに細分化した区域もあります。なお、その地区委員会の予算は市の予算の一部から出ています。

続いて、自治体の収支の内訳について説明します。まず、歳入に関してですが、北欧は、高負担高福祉と表現されるだけあり、税収が 69.4%と最も多くなっています。ちなみに町田市は歳入のうち税収が 41.5%だと聞くと、この 69.4%という高さが伝わるとと思います。また、税収の他には、補助金が多くなっています。

次に歳出についてです。教育活動への支出が 41.8%で最も多く、続いて福祉関連が 36.7%となっています。同じく町田市では民生費（福祉に関する費用）が 57.1%なのに対し、教育活動にはたった 7.8%しか使われていません。これを比べると、スウェーデンでは特に教育活動に力を入れていることが分かります。

次に、スウェーデンで行われている福祉政策について述べていきたいと思います。スウェーデンでは、両親手当や妊娠手当、児童手当などの社会保険制度があり、その上、幼稚園から大学までの学費が無料となっているなど、子育てに関して手厚い支援が行われています。

また、医療体制に関しては、現在救急医療を要するケース以外は 24 時間の地域対応が

可能となっています。また、保健医療センターに自ら出向くことができない人たちのために、24 時間体制の訪問看護・在宅医療サービスが 3 段階に組織化されています。レベル 1 では地域看護師による訪問看護サービスが、レベル 2 では地域医師と地域看護師による在宅医療サービスが、レベル 3 では専門医・看護師による高度な医療資源による在宅医療サービスが提供されています。

次に高齢者福祉に関してですが、社会サービス法（1980 年制定）と保健・医療サービス法（1982 年制定）があります。

社会サービス法は、「人々の経済的および社会的安全、生活条件における平等、社会生活への積極的参加の促進」を理念とし（第 1 章第 1 条）、また、単に援助を提供するだけでなく、「個人や集団の所有能力を解放し、かつ発展させること」を目指すものとなっています。さらに、社会サービス事業は、「人々の自己決定権と独立した人格の尊重」を前提として実施されなければならないとされています。日本の社会福祉六法と異なり、現金・現物給付のすべての形態の支援を内容としています。このように高齢者は、児童や障害者とともに社会サービスの重要なグループとして位置づけられています。

また、保健医療サービス法の理念（第 2 条）は、「質の良い保健医療サービスをすべての国民に、平等に供給」することであり、サービスは「すべての人の対等な価値と個人の尊厳の下に提供」されなければならないとされています。社会サービス法によるホームヘルプ・サービスに関しては、全国のコミュニティが 24 時間体制の供給システムを確立しています。

このような福祉の拡がりのおかげで、2023 年度の幸福度指数においても世界 6 位になっています。

[参考文献]

財団法人 自治体国際化協会、「スウェーデンの地方自治」、
(<https://clair.or.jp/j/forum/series/pdf/j15.pdf>)

○現地訪問先での学びや感想

今回の研修で、事前学習では触れられなかった新しい学びとして、以下のことが分かりました。

まず、スウェーデンの市で行われる福祉支援としては、障害者支援や DV を受けている人へなどの家族支援、公園などの公共施設の建設や保持、知的障害などを含む特別支援や依存症問題などがあることが分かりました。また、新しい地域を作る際、市が必要な数を決めた上で、学校や高齢者施設、障害者施設を作るのが義務付けられているそうです。

次に、スウェーデンのソーシャルワークについてですが、12 名のソーシャルワーカーが

大人子ども合わせて約 900 名を担当しています。彼らは、医師や学校の先生から情報をもったりミーティングをしたりした上で、法律に照らして必要な支援を判断します。また、スウェーデンの行政のソーシャルワーカーは 5 部門に分かれていて、ソーシャルワーカーの資格を取ったら、最初はいろいろな部門を試すそうです。

また、子どもの保護についても、社会福祉法と強制保護法という 2 つの法律の下に手厚く行われています。まず、「子どもは社会の責任である」という考えがあるため、もし何かあれば、地域の人や学校から市町村に連絡するのが義務づけられています。その上で、次の 2 つのいずれかの理由で保護が行われます。一つ目は、親の虐待やネグレクトが認められる場合です。二つ目は、子どもが犯罪などに手を染めてしまい、親の手に負えなくなる場合です。もしそれらの理由で強制保護をする場合、政治家に頼んで裁判を開いてもらう必要があります。

そもそも、そのような家庭環境に恵まれない子が生まれないようにするため、子どもができるときは育てられるか調査を行っているそうです。また、生まれてからも家族になにか問題が生じたら、ファミリーセラピーを受けられるそうです。

さらに、依存症問題についても手厚いサポートがあるそうです。まず、依存症問題については、障害者福祉の予算のうちの 10 分の 1 が使われています。さらに、スウェーデンでは市町村が不動産を持っているため、依存症患者の転居に融通を聞かせることが可能です。また、依存症患者への強制保護法もあり、それは裁判で最終決定がされますが、年間で 2 人くらいが保護されているそうです。

これらのことを学び、私は、福祉の分野でここまで義務があることがとても驚きでした。日本で義務と聞くと、三大義務の印象が強く、また、それらは果たすのが大変だし、個人単位で果たすものだという印象がありました。

一方で、今回学んだ中にある義務は、日本のものよりも、社会全体で、幸せに豊かに生きるため、という印象があるように感じました。どちらの方が大事、というのではないと思いますが、これらのスウェーデンの政策を参考にして、日本にも“社会全体で、幸せに豊かに生きるため”の福祉関連の義務がもう少し多くあると良いなと感じました。

ストックホルム市における都市開発について

加藤なつみ

ハンマルビー・ショースタッドは、スウェーデンの首都ストックホルム市中心部の南に位置する居住地区だ。工業地帯だったこの場所が国を代表するエコタウンとなったきっかけは、オリンピックだ。ストックホルム市は 2004 年の夏季オリンピック開催地に立候補した結果選ばれなかったのだが、住宅開発はそのまま進められることになった。環境にやさしいまちづくりへの取り組みをしていることで有名で、「ハンマルビー・モデル」と呼ばれて世界から注目されている。具体例には、廃棄物や下水をエネルギーとして活用して地域内で循環させるシステムやごみの分別費用を住民が負担しなくてよい制度ができていたり、住宅の屋上緑化が進んでいたりしている。

実際にハンマルビー・ショースタッドを訪れて、北欧の街並みと聞いて真っ先に思い浮かぶ憧れのような美しい街並みであることに感動した。そんな景観の美しい地域が環境に配慮したまちづくりを行っていることが印象的だった。私はこれまで、美しい街並みを作ろうとするとそれに気を取られて環境まで気を配るのは難しいと思っていた。しかしハンマルビー・ショースタッドではその両方を実現していた。ハンマルビー・ショースタッドを案内してくださった方によると、スウェーデンでは芸術を大事にしている、建物を作るとき 10% は芸術のために使うという決まりがあるという。さらに、どこに住んでいても海から 300 メートル以上は離れないようになっていて、「水の都」といわれているようにやはり景観も重視していることがわかった。

また、特に私が興味深いと感じたのは車の使い方だ。ハンマルビー・ショースタッドには車が多く入らないようにできている。そして車の数を減らすため、何人かでお金を払って車を使うカーシェアが普及している。これにより、環境負荷を半分にすることを目標としている。日本にもカーシェアの仕組みはあるが、まだ完全には発達していない。環境問題に加えて、公共交通機関が行き届かない地域の課題もあるため、今後カーシェアがさらに広まるとよいと考えた。

このように、ハンマルビー・ショースタッドは見た目の良さと環境へのやさしさといった機能面を両立させているという点でまちづくりにおいて先進的な地域であり、世界から注目されているということに納得した。

[参考文献]

- ・国土交通省、コラム 海外の環境都市～ストックホルム市ハンマルビー・ショースタッド～、(<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h23/hakusho/h24/html/n121d000.html>)
- ・Hammarby Sjöstad (公式サイト)、(<https://hammarbysjostad.se>)



プレスクール 事前学習を経て

木村 大高 衛藤 北久保 長尾

プレスクールは、1歳から6歳の子どもが行く保育園、幼稚園のような施設のこと。スウェーデンにおいてプレスクールでは、男女平等と多様性を学ぶ。移民や難民を多く受け入れてきた国であるため、義務教育の段階で人との違いを理解することや、相手を尊重するという文化を根付かせる必要がある。その方法として、リーカベハンドリングスプランというものがある。このプランはわかりやすく表現すると「人間を平等に扱うプラン」であり、各学校において生徒同士を平等に扱うものとして、設置が義務付けられている。このプランはいじめや差別のもとになりやすいとされている性別・年齢・人権・障害・LGBTなどで人を差別しないように計画的に学ぶというものである。いじめや差別などが起こってしまってから使うだけのプランではなく、予防対策も含んだ内容になっているのが特徴である。

プランに基づいて多様性等を学ぶ方法は、例えば10月24日の「国連の日」には、子どもの権利週間を設けて子どもの権利について、2月6日の「サーメ族の日」には民族についてそれぞれ学んでいる。年間を通して常に多様性に目を向けることで、自分と周りのすべての人に同じ価値があり平等であるということを自然に学ぶことが出来る。言葉で平等というのは簡単でも実践していくことは難しいため、小さい頃から平等を学ぶ教育の場を計画的に作り、少しずつ日々学んでいくことが大切である。

スウェーデンでは子どもたちの就学前において、「遊び」を通した教育を行っている。

(förskola (フォースクーラ)) と呼ばれる就学前学校 (プレスクール) では、子どもたちそれぞれのニーズや興味を確認することに重点をおいた教育に力を入れている。その教育のなかでは、先生が子どもたちに一方的に教えるのではなく、子どもたち自身が興味を持った「遊び」が重要視されている。

この教育方針は実際に就学前教育プログラムとして国で規定されており (Skolverket, 2018; Läroplan för förskolan (Lpfö 18))、「教える教育」だけでなく、教育とケアを統一として捉え (=エデュケア)、子どもの興味や関心に基づいた遊びのなかで、安心感や自己肯定感を育み、子どもそれぞれの全面的な発達と学びを促進する旨が掲げられている。

様々なツールが用意されているプレスクールで、子どもたちが好奇心を持ち、自分の興味に基づいた遊びをする。それらを主体とし、先生と一緒に発展させ、子どもたち独自の世界観を作っていく。この過程により、創造力や課題解決力、社会性を身につけることができる。それと同時に、子どもたちそれぞれの特性やニーズについて理解する重要な機会にもなる。

その他にも、子どもたちはこういった遊びを通した人との関わりの中で、言語の違いやハンディキャップ、ジェンダーといった多様性の尊重をはじめ、自然を大切にする姿勢なども身につけることができる。やがて、これらは国連による持続可能な開発目標「SDGs」に

つながるであろう。

スウェーデンでは障がいを持つ子どもたちに対応するために、市町村が特別教育支援チームを作り、プレスクールの先生たちの支援を行っている。実際に訪れてみて、特別教育支援チームが地域内のプレスクールを訪問していることが分かった。プレスクールの先生が、支援が必要だと感じた時に特別教育支援チームを呼んだりすることもあるそうだ。

また、私たちが訪れたプレスクールでは、99 人の子どもに対し、20 人の大人が配置されていた。20 人のうち先生の資格を持つ人が 6 人、アシスタントが 11 人、障がいの支援の知識があるスタッフが 6 人で構成されていた。このようにスウェーデンでは障がいの有無にかかわらず、子どもたち 1 人ひとりに合わせた対応ができるような環境が整っていると感じた。また、プレスクールの先生だけが大きな負担や責任を抱えるのではなく、それぞれの専門性を活かした支援が行われていると思った。

日本とスウェーデンの子育て支援制度において一番違いを感じたことは、どの施設にも日本より多くの人員が確保されていることだ。例えば、日本の幼稚園や保育園にあたるプレスクールでは、日本の最低配置人数が 20 人の子どもにつき 1 名なのに対し、スウェーデンでは先生 1 人とアシスタント 2 名が最低配置人数だった。また、小学校は、日本の 1 クラス当たりの人数が 40 人なのに対してスウェーデンは 25 人で、さらに 1 年生のクラスは担任教師が 2 名ついていた。保護者と連絡を取る専門の教師がいるため、日本の教師に比べて業務の負担が軽くなっていると聞いた。今日、保育園や幼稚園での教師からの虐待や、学校でのいじめが問題になっているが、これらは人員不足により、教師側に余裕が無くなっていることも原因の 1 つなのではないか。人員不足の問題もあり、難しい部分もあるが、児童が抱える問題にいち早く気付くためにも、1 人の教師への負担を減らさなければならないと感じた。

実際にプレスクールを訪問してみて、感じたことは 2 点ある。1 点目は、家族全体で育児に参加している点だ。お迎えの時間に子供たちが外で遊んでいるのを見てみると、お爺ちゃんが自分の孫を必死に探している場面に出会いとても微笑ましくなった。日本では、いまだに母親が育児をするというイメージが強いためこのような場面は、家族全体で育児に参加しているスウェーデンならではの事かなと感じた。2 点目は、園全体で「子供たち」を大切にしている点である。遊びにおいて大人たちが子供たちと一緒に遊び、子供自身が義務も権利もあるからこそ理解させる機会を作ったり、一緒に体験をしたりしていた。ご飯は自分の好きなものを自分で選ぶことができるのは権利が大切にされている点であると思った。また、子供たちが何について興味があるかを記録し、その子一人ひとりのことを理解し、先生と子供たちとの関係が大切にされているなどと思った。今回の訪問は日本の育児やサービスと比べる良い機会になった。そして、日本の施設ももっと自由に子供たちと保護者と先生たちの繋がりが密接になるべきだなと思った。



[参考文献]

- ・サガソウ 「スウェーデンの教育制度と特徴を詳しく解説」
(<https://sagasou.co.jp/2020/05/21/article68/>)
- ・日本財団 パラサポ 「スウェーデンに学ぶ幼児教育の最前線」
(<https://www.parasapo.tokyo/topics/22365>)
- ・Skolverket, 2018; Läroplan för förskolan (Lpfö 18)
(<https://www.skolverket.se/andra-sprak-other-languages/english-engelska>)
- ・ヒューマンチャイルドケア総研、スウェーデンの園での言葉の教育
(<http://www.human-ccri.jp/research/568/>)
- ・教育新聞、「世界の教室から 北欧の教育最前線 (10) スウェーデン版チーム学校」
(<https://www.kyobun.co.jp/article/p20181117>)
- ・石川衣紀, 田部絢子, 内藤千尋, 池田敦子, 石井智也, 柴田真緒, ... & 高橋智. (2021). スウェーデンの特別教育における専門行政機関の役割-「特別ニーズ教育庁」の訪問調査から. 長崎大学教育学部紀要, 7, 85-93.
- ・内閣府「2 仕事と家庭の両立支援」
(<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2005/17webhonpen/html/h1420210.html>)
- ・コクリコ、「スウェーデン式『外遊び教育』で『木に抱きつく意味』深い意味」
(<https://cocreco.kodansha.co.jp/cocreco/general/childcare/hYB6e?page=1>)
- ・パラサポ web、「スウェーデンに学ぶ、幼児教育の最前線『インクルーシブ教育』」
(<https://www.parasapo.tokyo/topics/22365>)

リハビリテーションについて

《スウェーデンのリハビリについてまたその歴史》

もともと、リハビリテーションはラテン語の Habil（有能、役立つ、生きる）という言葉から生まれ、病気や怪我などをした場合に元の Habil の状態に戻す、つまり Re-Habil していくという意味である。

リハビリテーションというこの概念が使われ始めたのは、第二次世界大戦がきっかけである。第二次世界大戦のイギリスでは損傷を受けたパイロットを治療し、再び戦場に向かわせておりまたそれ以外にも、身体的機能障害を持つ人を、軍需工業や労働市場に送り込む試みも行われた。大戦に参加した国々では、このように軍需産業や労働市場での労働不足を補う必要があり、また、戦争には参加しなかったスウェーデンにおいても、近代になって産業が進み、生産ということが社会の基盤となると、病気の人や機能に障害を持つ人を含め、治療による社会復帰ということが社会政策の上で重要な意味を持つようになった。

《ハビリテーションチーム》

スウェーデンではハビリテーションはリハビリテーションと同じように県自治体の管轄で、医療・教育・心理・社会およびテクニカルサポートによる連結された総括的な取り組みは、リハビリテーションの体系と同じである。

この連結された各分野の取り組みはハビリテーションと呼ばれ、児童ハビリテーションと成人ハビリテーションとに分かれて、機能障害を持つ人の全人生期間にわたって支援が行われている。

リハビリテーションは、各病院や学校などでも行われているが、ハビリテーションチームは、県自治体の地域別にそれぞれハビリテーションセンターに置かれている。

[参考文献]

北欧福祉研究所 (<https://hokuofukushi.com/nordic/post10115/>)

【ハビリテーションセンターの感想、学んだこと】

私たちが初日の午後に伺った研修先は Habiliteringscenter Brommaplan Vuxna で、そこで働く臨床心理士の方とソーシャルワーカーの方 2 名にお話していただいた。

ここのハビリテーションセンターはストックホルム郡内 30 カ所に相談窓口・センターで構成されている。ここでは子どもから大人までの障がいを持つ人々の相談サポートを行っている。障がいは自閉症や ADHD、脳機能障害、知的・発達・身体障害などあらゆる障害の種類と度合いに対応している。センターのなかでチームを分け、チームごとに異なる障害

者の相談に応じている。年齢別にセンターが設置されている。また、研究ユニットも設置されている。

この施設には理学療法士の方も勤めていて身体障害者に対する支援も行っている。対話での相談支援から、コミュニケーションに何らかの障害がある場合などは写真や絵などの補助器具を用いて、大事なのは「本人が何をしたいのか表現できるようにすること」とおっしゃっていたのが印象に残っている。また、心の悩みに関する相談では、診断はせずに、うつ病の原因かもしれない根本的なストレスを対処する根本治療をもとに行っていると聞きした。

私がさらに印象に残っているのは、自立についての認識で、お二人が「自立できることは他から何も支援を得られなくても大丈夫ということではない」とおっしゃっていたことである。私が、無意識的に行政や民間からのサポートに関して終わりがあるものと考えていたと気づかされる良い経験となった。スウェーデンでは施設や臨床心理士・ソーシャルワーカーが支援される側であるクライアントの人生に寄り添い、暮らしの中で密接に結びついていくのだなということを知ることができた。

スウェーデンにおける病児教育ケア

《教育と医療の連携》

入院後も通学時と同様の学習体制を作ることが法律で定められており、院内学級の教員は元の学校と連携体制にある。

病院にはITが完備されており、授業の参画や文化施設の見学等ができる十分な広さの工夫された学習室・図書館など日本の病院に比べて教育のための環境が充実している。

《スウェーデンの教育の保障》

「子どもの教育ニーズが存在している場所において支援を準備する」という指針の元、病院内学校(ホスピタルスクール)・病院内学級(ホスピタルクラス)・訪問教育など、個人の配慮・指導によって実施されている。

[参考文献]

石川衣紀, 田部絢子, 内藤千尋, 石井智也, 能田昂, 柴田真緒, & 高橋智. (2017). スウェーデンにおける病院内保育とホスピタルプレイセラピー. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 68(2), 115-124. (<https://core.ac.uk/download/pdf/83607101.pdf>)

【小児病棟での学びや感想】

スウェーデンのプレイセラピーでは土台に「プレイセラピーを通して癒しを得る」というスローガンがあり、そのスローガンのもと子どもに馴染みのあるものが題材として選定され、ゲーム・絵画・工作・砂遊び・料理など、特に五感を刺激するものが多く用いられる印象を受けた。

また子どもに対する病気の説明ではマスク、(針を抜いた)注射などの実際の医療行為で使用する医療器具と同じものが使われ、なぜここに入ったのか、これからどのような治療が待っているのかを子どもがそれらを実際に取り扱いながら処置への理解と心理的準備をしていく環境が整っていることにとっても衝撃を受けた。

子どもであっても患者として自分が置かれている状況を知り、理解する権利があるという前提のもとこれから経験する治療について、医療スタッフとともにライオンや女の子や男の子の人形と医療模型を使って遊びながら子ども自身が子ども自身のペースで理解を深めていく環境が整っているのは、日本とは大きく異なる点である。子どもの権利を守り、尊重することを重要視しているスウェーデンだからこそこれほど充実しているのだと感じた。

さらに子どもに対する支援だけでなく、親に対する支援もスウェーデンでは充実しており、スウェーデンでは、子どもが療養中の保護者にたいして仕事を休んで看病に当たれる「看護休暇」が保障されている。看護休暇は両親保険の一部である有給休暇であり、12歳未満の子どもが病気になったとき、子ども一人につき年間120日まで認められている(子どもが二人ならば240日間)。このため保護者は、自身の職位や給与を心配することなく子どもの治療に専念することができ、病院側も保護者の同伴を求めやすい体制が整えられている。日本は子どもが病気になると離婚率が高まるが、その背景にはこのような病気の子を育てる親を支援する制度が十分でないというのも一つの要因として挙げられるだろう。その他にも親同士の交流の場があったりするなどよりよい子どもの支援には親や家族への幅広い支援の充実化が欠かせないのだということを病院の訪問を通して学ぶことができた。

小中学校について

スウェーデンの小・中学校はグルンドスコーランといい、7～15歳が義務教育として同じ学校に通う。その大半が公立学校で学費は無料であり、日本で行われているような入学試験はない。日本のように学区制でもないため、各児童が自宅から通える範囲で希望する学校に入学する。授業はスウェーデン語で行われ、国語・数学・理科・社会・英語・第二外国語(仏・独・西語から選択)・音楽・家庭科・体育などを学ぶ。国が定める必修科目以外は選択科目となり、学校ごとに独自のカリキュラムが組まれている。また飛び級や留年制度があ

り、本人や保護者、担任の先生と話し合ったうえで個人の能力に合わせた進学が可能である。授業は比較的に関日本よりゆっくり進むとされ、休日に関日本の学校より多い。高校入試もないが、倍率の高い高校に入学するためにはグルンドスコーランで良い成績を納めておく必要がある。近年では、優秀な教師が都市部に集中し地域によって差が生まれつつあることが課題として考えられている。

そして最も大きな特徴は、リーカベハンドリングスというプランがあることだ。これは、人間を平等に扱うための義務化されたプランである。義務教育の段階で人との違い（性別・年齢・人種・障害・LGBT など）を理解することや、相手を尊重するという文化を根付かせることを目的としている。このプランが学校で義務化されている背景には、移民や難民を積極的に受け入れてきたというスウェーデンの歴史が影響していると考えられる。

【小中学校での学びや感想（Grimstaskolan）】

実際に現地の小中学校を訪問して印象に残ったことの一つは、生徒とその家庭に対するサポートが充実していたことである。学校には臨床心理士、カウンセラー（ソーシャルワーカー）、スクールナース、就労支援員、特別支援員などからなる健康チームが配備されており、日々生徒たちの学習や心身の健康のための活動を行っている。苦手な教科がある生徒には、チームのメンバーと教師が情報を共有し連携しながら、3～4人の少人数クラスで学習をサポートする。学校で働く臨床心理士は生徒への心理的なサポートだけでなく、先生に対する指導や保護者との面談も行う。成績が悪い生徒には、最初の簡単な診断として心理士が知能テストを実施する場合もある。またその背景にあるストレスに注目し、支援の仕方を考える。生徒が抱えるストレスには、周りの大人や自分自身からのプレッシャー、治安の悪化からくる不安に加え、経済的に余裕がない家庭で親の働く時間が長いことにより生徒が家で家事などをしなければならず、休む時間が十分にとれていないというストレスもある。社会的な問題を抱える家庭には、親子両方への支援を考え様々なサービスを紹介する。心理士自身が治療を行うのではなく、あくまでサポートとしてサービスを紹介し利用してもらえるように意欲を持たせることに重点を置いている。スウェーデン語がわからない保護者には、通訳者とも協力しながらサポートを行う。他にも、「STOP, My Body」という暴力予防のプログラムを行っている。これは市が義務化しているもので、身体的・心理的な暴力とは何かを学ぶことで生徒が暴力を認知できるようにし、されたとき又は見かけたときにどうするかを考えるプログラムである。このような様々な取り組みに加え、年に数回アンケートを行い安心できる学校かどうかをチェックしており、その結果は市にも送られる。

印象に残ったことの二つ目は、社会全体で子供の教育を支える体制が整っていたことである。低所得者が多い学校には、その分市から多くのお金が支給される。また、子供やその家庭の問題を学校が市に伝えることが義務とされ、実際に年間 100 人ほどの生徒の問題が報告されているという。その際は、カウンセラーが直接市へ連絡することが出来る。他にも、

警察とも月に一回情報交換を行い犯罪予防のため協力したり、学校の近くのセンターと連携して生徒が放課後過ごせる居場所を提供したりしており、地域全体で子供を支える仕組みができていていると感じた。このように、スウェーデンの学校は日本よりサポートや指導が充実しているが、スウェーデンにおいては社会的に学校が担う責任が日本より大きいという違いがある。そして充実したサポートを可能にしているのは、低所得者などの社会的に弱い立場の人々が成功することは社会にとってメリットであるという考え方だと思う。あらゆる人が排除されず違いを認め合い共生していくというインクルーシブの考えは、教育分野でも大きな影響を及ぼしていることがわかった。

スウェーデンの精神科医療について

幸福度ランキング上位国として知られるスウェーデンだが、実は精神科疾患を患っている方が多いという事実がある。

日本でも患者数の多いうつ病の患者数がランキングで見るとスウェーデンが 51 位、日本が 115 位とスウェーデンの方が上位になっており、毎年約 1,500 人が自ら命を絶っていることがわかっている。そして、スウェーデンでは抗うつ薬の処方が多くおよそ 10 人に一人が抗うつ薬の処方を受けている。

そんなスウェーデンの精神疾患を患う患者は 1960 年代まで施設収容が主流であった。それからノーマライゼーションの考え方が出始め、徐々に病床数が減少していく。1967 年に約 35,000 床、2012 年には約 4,300 床まで減っている。

[参考文献]

・ 国立社会保障・人口問題研究所、「海外社会保障研究（182）」
(<https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/kai182.pdf>)

・ Sveriges Kommuner och Regioner、Statistik om hälso- och sjukvård samt regional utveckling 2012、
(<https://skr.se/skr/tjanster/rapporterochskrifter/publikationer/statistikomhalsoochsjukvard/samtregionalutveckling2012.65553.html>)

スウェーデンの精神科医療における心理療法・心理職について

事前学習としてスウェーデンの精神科医療に関わる、心理療法とそれらを扱う心理職の資格について調べた。精神疾患を抱える人に向けて心理的な問題解決を図るために用いら

れる心理療法には多くの種類がある。例えば、思考や感情に焦点を当てた精神分析療法、行動変容を目指そうとする行動療法、認知変容に焦点を当てた認知療法、催眠療法、芸術療法といったものが挙げられる。そして、スウェーデン発祥のセラピーとしてスウェーデンハンドセラピーと言われるものがある。スウェーデンでは、タクティール・マッサージと呼ばれ、皮膚をなでるように柔らかく触れるハンドマッサージのことを指す。効果としては、身体への働きかけだけでなく、触覚神経を刺激することで快適ホルモンと呼ばれるオキシトシンの分泌が促され、それによって穏やかさや安心感がもたらされるといった精神面にも働きかける。そして、施術する側と受ける側との間に親密度や信頼感を生み出すため、触れ合うことで生まれるコミュニケーションとしての役割も果たしている。

そういった心理療法を扱う心理職の資格について、以下の情報はあるブログからの情報となり、文献での裏付けはまだ取れていないが、国家資格としてはサイコセラピストとサイコロジストという資格がある。サイコロセラピストは対話やトレーニングを通して、認知や情動、行動といった心に関する部分にアプローチすることを仕事としている。サイコロジストはサイコセラピストよりも資格取得の難易度が高く、サイコセラピストの領域をカバーした上で、より専門的な領域の仕事ができるようになっている。

多職種連携について

現在スウェーデンでも精神福祉領域には、精神科医だけでなく看護師や心理療法士、作業療法士、社会福祉専門職などの多くの専門職が関わっており、更に県・基礎自治体の社会サービスとの連携を行っている。スウェーデンはとくに社会サービスとの連携の強さが特徴にあるが、このようになるきっかけとなったのが「脱施設化」である。脱施設化とは、スウェーデンで1970年代半ば頃から起こった精神科病院縮小の動きのことである。目的は精神保健医療の社会化及び地域化である。これは2つの段階に分けられる。

第1段階は組織ごとに圏域を定めて精神医療を提供する精神科セクトリゼーションというシステムが開始される。これによって精神科看護師や心理療法士、社会サービスの専門職など在宅ケアチームの専門職配置の拡大が推進される。

しかし、急速な病床数の減少によって、万全でなかった県・基礎自治体の社会サービスとの連携が円滑に行われず支援が滞るという問題も生まれた。そこで第2段階の改革が行われた。

第2段階は1995年から試験的に導入された精神科保健福祉改革である。地域での精神障害者のケアの充実化と、彼らの社会参加を支援する設備を整えようとした。ここで掲げられた目標は「これまでの施設処遇から、適切な治療方法の開発のもと、出来る限り地域でのケアを目指し、精神障害者の生活を改善し社会参加への道を広げる」というものである。これ

により社会サービスや精神障害者の支援の計画と調整に関する基礎自治体の責任も明らかにした。以上から、脱施設化に伴って、精神医療における県・基礎自治体による社会サービスとの連携の重要性が確認され、精神医療支援の拡大につながるようになったと考えられる。

そこで、基礎自治体による精神障害者への社会サービスについて説明する。日本とスウェーデンは、ほとんど同じような社会サービスの形態を有しているが、スウェーデンの基礎自治体ではパーソナルオンブズマン制度を実施している。少々古い情報にはなってしまうが、2008 年 12 月の調べによると、290 あるコミューンのうち 250 の基礎自治体で導入されている。活動件数は 109 に上り、300 人分を超えるパーソナルオンブズマンが活動に従事している。この制度の役割とは簡単に言うと「支援」と「監督」である。パーソナルオンブズマンは利用者が必要な支援を手に入れるための支援を行うとともに、行政が必要な支援を提供しているか監督し、関係機関間の連携を促進するための調整機能を担っている。そして、特徴的なのが、パーソナルオンブズマンのもつ独立性だ。これは、ほか全ての専門家グループの仕事の枠組みにとらわれることなく多様なアプローチをとりやすくするためである。

このような連携システムを実施することにより、スウェーデンでは柔軟で多様な精神障がい者への支援が行われていると考えられる。

[参考文献]

国立社会保障・人口問題研究所、「海外社会保障研究（182）」
(<https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/kai182.pdf>)

【BUP を訪れた感想・学び】

私たちは精神科医療についてお話を聞くために、スウェーデンの自治体が運営する子供を対象とした医療センターである、BUP を訪れた。BUP では、子供や若者ユニットに勤める若い臨床心理士の方からお話を聞いた。BUP では精神疾患全般に苦しみ、特に自殺、自傷行為の恐れが高い子供、症状が重い子供に向けて、弁証的行動療法を用いて、支援を行っていた。弁証的行動療法とは、認知行動療法の一つであり、自分では制御できない、激しくつらい感情を抱えて苦しんでいる人のために開発された治療法である。特に、境界性パーソナリティ障害を持つ人に有効であり、問題行動の中にある適応への努力を見出し、不適応な行動を減らすことによって問題行動への解決を図るという療法である。例えば、自傷行為がある子供に対しては、抱えきれない気持ちを表現する方法を自分の身体を傷つけるリストカットのようなものではなく、別なものに変換することでだんだんと表現方法が変わり、適切な対応、行動が身につけられると話していた。このようにスウェーデンでは主に認知行動療法を用いて、心理支援をしていることがわかった。

また、そういった心理療法を扱う心理職の国家資格を取得するためには、5年間大学で学んだ後に1年間働きながら実習をし、経験を積んでいくことが求められるそう。理論や会話方法などを大学1年生の時から学び、4年生の時には外来の形式で大学にて患者と対面したり、病院や初期医療センターで3ヶ月の実習を行うそう。こういった経験を経て、資格を取得した心理職も同じ人間であることには変わらないため、患者を助ける、支援するとともに自分のことも守らなければならないと話していた。この2つを同時に叶えることは非常に難しいことであるからこそ、100%助けることはできないと心得ていること、仕事以外の時間を使わないと助けることができないから緊急性が高くない限り、自分の時間を犠牲にするということはしてはいけないことを心理職の心構えとしてお話ししていた。また、共感するとともに行動を変えることも伝えていくことが心理士の役割としてあることを学んだ。今の状態を受け入れなければいけない一方で、危険行為、問題行動については変わらなければいけないという「受容」と「変化」をバランスよく行っていかなければならず、このバランスを取るのが非常に難しいと学んだ。さらに「自立」と「助けを求める」という2つもバランスをとれるように導いていくことも大切だとわかった。

このように事前学習で調べたことに対する答えを聞くことができたのと同時に、心理職として働きたいと考えている私にとって心理職が持つべき心構えや役割を知ることができたのでとても有意義な時間を過ごすことができた。

【臨床心理士の話聞いた感想】

初めて臨床心理士の方の話を聞いて、たくさんの学びを得ることができた。「Acceptance」と「Change」という対立した言葉があり、それぞれ「今の状況を受け入れる」と「今の状況を変えていく」という意味で、私はうつ病などを患った時にどうしても今の状況を変えていかないと！という思いが強くなってしまう患者さんが多いのかなと思うので、受け入れることが大切だと知ることができた。また、自立というのは1人で生きられるようになることではなく、必要な時に助けてもらうことだということも学んだ。私も誰かに助けられて生きているが、「自立」という言葉を聞くとどうしても1人で生きることができるとイメージをしてしまっていた。しかし、お話を聞く中でそうではないということを学ぶことができた。

障害に対する考えの違い

藤本千世 石井莉愛

○日本の障害者福祉の歴史

第二次世界大戦後の日本における障害者施策は、戦争によって被害を受けた多くの子どもを救うため、昭和 22（1947）年に障害児施策を含む児童福祉の基本施策を定めた児童福祉法の制定から始まったといわれている。その後、同年には学校教育法が制定され、障害のある児童生徒への教育を含んだ新しい学校教育制度が開始した。

こうした状況のなかで、1970（昭和 45）年には障害の種別を超えた「心身障害者対策基本法」が成立、その後、ノーマライゼーションの理念の社会的な広がりあいまって、1993（平成 5）年には同法の改正により、障害者施策の基本となる「障害者基本法」が制定された。

その中でも、障害者基本法は、障害のある人に関係する一番大切な法律である。障害者基本法は、障害のある人の法律や制度について基本的な考え方を示している。

近年では障害者基本法が改正され、障害を持つ個々人の尊重を大切にしている。さらに、国連の障害者の権利条約とは、障害のある人の権利を守るという国の約束である。障害者の権利条約は、「私たちに関係することを決める時は、必ず私たちの意見を聞いて決めること」（英語でいうと：Nothing about us without us）という考え方に基づいて、日本人を含む、世界の多くの障害のある人が参加してつくられた。

○スウェーデンの障害者福祉の歴史

スウェーデンの社会システムの特徴として、徹底した普遍主義と平等主義をあげることができ、その元で高度な福祉国家を築いていると言える。しかし、障害者福祉の歴史的展開を見ると、1980 年代頃まではスウェーデンにおいても障害者差別の歴史があったことが窺える。障害者はコミュニティの措置により幼い頃から家族と引き離され、大規模施設に入所させられており、障害者本人や家族の意思は全く反映されず、障害者が自己決定できるとは誰もが考えていない状況であった。しかし、1982 年に施行された社会サービス法、翌年に施行された保険・医療法により障害者にも他の国民と同様にサービスを受ける権利を保障する基盤が形成された。さらに、1994 年に「機能障害者のための援助及びサービスに関する法律」いわゆる LSS 法の施行により、障害者のサービスを受ける権利がより明確化された。また、1996 年の施設解体法施行により、スウェーデンの障害者福祉政策も一気に「施設」から「地域」へと生活の場が変わり、社会の視点もようやく変わっていった。

スウェーデンの障害者ケアは主に社会サービス法と LSS 法に拠っている。社会サービス法とは、母子福祉・社会扶助・障害者ケア・高齢者ケアなどを含む社会サービスにおける包括的な基本法であり、LSS 法とは特定の機能障害者の自己決定権を強化するために以前の

知的障害者ケア法が発展的解消を遂げたものであり、社会サービス法を補完、補強するものである。つまり、社会サービス法により普遍的サービスの実現を確保しつつ、特に重度な障害者に対しては LSS 法によりインテンシブなケアの提供を実現するという、普遍的かつ合理的な制度体系を構築しているのである。

スウェーデンの福祉体系は国民全体を対象とした包括的なもので、コミュニーの責任で障害者の住宅と所得を確保することを保障しており、その上で積極的に障害者のニーズに基づいて生活を保障するためのさまざまな福祉政策を展開している。個人個人の自己選択が尊重され、パーソナルアシスタント制度が大いに活用され、大きな役割を果たしていると言えるだろう。

障害者向け高等学校～Aelanda gymnasium～

松村菜々 田村梨乃

○スウェーデンの特別支援教育の制度

スウェーデンでは、1985年に学校法が成立された。これは、就学前学校から成人教育に至るまでの広範囲に及ぶ法律である。学校法は、時代の変化とともに生徒の権利を強くするための規定が作られてきた。しかし、1985年に成立された学校法は、時代とともに変化が求められてきた。2008年、スウェーデン政府は学校法による国の特別支援学校の目的を拡大し、視覚障害、重度の機能障害、重度の言語障害のある生徒を含むようにすべきだと方針を変更した。

○障害者を受け入れる学校の例

私たちが学生たちと交流したストックホルム大学では、学生・教職員ともに多様な国籍・人種で構成されており、充実した支援形態が整っている。また、高校との連携も行っていて、障害を持った学生が多く在籍している。

ストックホルム大学では、障害当事者の専門団体からの紹介に応じて直接生徒本人に会いに行ったり、高校からの訪問を受け入れたりしている。また、オープンキャンパスで障害のある学生へのサポートについてアピールを行っている。

支援内容としては、個室の使用が認められる、必要な補助機器を借りることができる、障害者問題担当職員がいる、助成金の申請ができるなど、様々な支援がある。

[参考文献]

清原舞. (2012). 「スウェーデンの障害者福祉: 政策・運動・実践」

○視察について

2日目の9月5日に訪問した。昼食は、この学校の給食を食べた。入口は違うものの、一般の高校と同じ建物の中にあった。木材が多く使用されている内装で、落ち着いて過ごせる印象を受けた。療育学習または自動車・レストラン・食料から選べるプログラムがある。目的は、卒業したら、簡単な仕事を貰えることとしている。



・学童

12～20 歳まで、小中学校に通っている人も通うことができる。時間は、14 時から 17 時、朝 6 時から 8 時である。朝食も取ることができる。親が子供と離れ、休むことができるようにとおっしゃっていた。

・言語発達について

それぞれの必要性に合わせて、写真を使ってコミュニケーションをとるという。本人が自分の意見言えるように、職場で自立できるようにということを大切にしている。

- ・卒業してから

卒業してからも通うことができ、ある生徒は10年間くらいソーシャルスキルトレーニングをした。

- ・中学校との関わり

どのように対応したか教えてもらうために中学校の先生と連絡をとることもある。中学生が自分に合うかどうか確認するために、高校に実習に来ることがある。

- ・訓練・実習について

自分の顔を描く訓練やビデオをみて、身体的な訓練をすることなどがある。また、料理や車の整備について学ぶこともできる。そして、スウェーデンには、「FIKA」というお茶を飲みながら話をする休憩の時間が習慣としてある。そのため、「FIKA」の時にどのような話をするか学ぶことを大切にしているそう。また、企業に実習に行き、そこで就職することもある。さらに、学校内に一般の人が車を持ってきて、整備することでお金をもらえるという働くことに近い環境がある。そして、お客さんへの対応の仕方を学ぶために、作ったものをイベントなどで売ることもしているそう。

- ・それぞれの役割

学校の担任は教えることに集中するため、メントルという学校と家族の間に入る役割の人がいる。就労支援教員もあり、生徒が学ぶべき内容があるか確認したり、単位が足りているか確認する。また、先生を助ける生徒アシスタントもいる。さらに、スクールナースやカウンセラーなどから構成される学校の健康チームもいる。

○考察

働くことを意識している環境に感銘を受けた。実習に行ったり、学校でお客さんと接したりする機会があれば、苦手を発見でき、働く前に準備することができる。また、自分に合う職場を見つけたり、働くということ自体に慣れることができると思う。障害のある方は、苦手が多い分、環境に慣れることが難しいと思うが、このように事前に準備できる場があることで、継続して働きやすくなると感じた。

そして、様々な役割の職員の方が協力して、学校に通う方にとって過ごしやすい環境を作っていると実感した。日本では、担任の役割が多く、業務量が問題となっている。分担して、チームで支えていくという視点は大切であると思った。しかし、役割が分かれる故に、しっかりと連携して支援の溝ができないように注意することが求められると思った。

また、どの視察先でも共通していることだが、本人が自分の意見を言えることを重要視し

ており、自己決定が大切にされていると改めて感じた。

そして、日本では、国籍や人種、言語、性差、経済状況、宗教、障害のあるなしにかかわらず、すべての子どもが共に学び合うインクルーシブ教育が実現されているとは、言い難い。特に高校では、障害のある生徒とない生徒が関わる場合は、経験上、ほとんど無いに等しい。合理的配慮や専門職配置が進み、少しでもインクルーシブ教育が実現してほしいと感じている。

障害者の方が働くレストラン～Himmel och Pannkaka～

松村菜々

○スウェーデンの障害者雇用制度

- ①賃金助成雇用：1980 年に開始。一般労働市場における障害者のための雇用創出が主な目的であり、補助器具や機能低下に対する適応、支援人付雇用が不可能な場合に適用。助成対象となる賃金費用には、疾病賃金、休暇賃金、社会保険料等を含む。
- ②安全雇用：2006 年に開始。相当の機能低下によって労働能力が大幅に制限されているグループが対象。他の方法によって労働能力低下によるニーズの充足が困難な場合、サムハル雇用に対する選択肢として提供。安全雇用は職場で必要な支援を得られるので、個人支援人と組み合わせることは不可。
- ③能力開発雇用：2006 年に開始。労働能力評価・認定と職業指導を終え、労働市場参加のためにさらなる労働能力開発支援を必要とするグループが対象。就業内容以外にリハビリテーション、補助器具による適応、労働訓練、職業指導などが含まれ、短期間であれば他の職場や職種を試すことも可能。
- ④公共保護雇用：1985 年に開始。社会医学的な理由による機能低下を有する失業者、長期的に深刻な精神障害により労働生活の経験が無い、又は労働生活から長期間離れていた人々が対象。
- ⑤サムハル雇用：1980 年開始。他の方法による雇用の確保や就業が困難である深刻な機能低下者が対象。スウェーデン政府が 100%の株式を保有する国営の株式会社・事業所は、一般就労への移行目標が求められる。

○サムハル雇用の例

マルメ市事業所の取り組み

・「受注→分類→洗濯→配送」まで一貫して行われている。

- ・勤務時間は朝 7 時から午後 3 時 30 分。
- ・働いていることを実感するために、あえて機械化・オートメーション化せずに業務を行っている。身体を使ったシンプルな仕事が、発達障害・精神障害等の当事者にもマッチしている。
- ・事業所外での業務を請け負うことによって社会との繋がりが強くなり、顧客から直接に声をかけられる経験も増え、従業員の社会的スキル向上への刺激にもなっている。

○視察について

私たちは、4 日目の 9 月 7 日の昼食に、障害を持つ方が働くレストランに訪れた。他の訪問先とは違い、直接お話を聞くことはできなかったが、その場でお昼を食べることで、様々なことを感じ取ることができた。トレーを持ってならば、料理を選択する方式だった。この日のメインメニューはラム料理、パンケーキであり、ミルク系のスープがついていた。少し離れていたが、ショッピングモールと同じ建物内にあった。



○考察

日本でも、就労継続支援 B 型や就労継続支援 A 型で障害者の方が働くパン屋やレストランがある。私は、実習先で B 型作業所に訪問したが、地域の人に継続してきてもらうためには、お客さんの障害者の方が働く場だから貢献しようという思いより、おいしい・居心地が良いからという思いを引き出すことが重要だと学んだ。今回スウェーデンで訪問したレストランも、内装がとてもきれいで、料理も豊富でまた行きたいという思いになった。継続していくためには、おいしい、雰囲気が良いという動機でお客さんに来てもらうことが大切だと思った。

また、ショッピングモールの近くにレストランがあり、障害のある方もない方も共生しているということを感じられた。モールの近くに障害のある方が働く場があるというのは、日本ではあまり見られないだろう。

法政大学の多摩キャンパスにも障害のある方が働く、エッグドームスローワールドカフェがある。2 限終了後に行くと、いつも混んで入れない状況だ。私もこの学食がとても気に入っており、2 限授業がない時や授業が早く終わった時に食べに行っている。

今も進みつつあるが、もっと障害者の方の社会参加が進み、障害のある方、ない方もともに共生できる社会になってほしいと思った。また、私自身も障害雇用で働くが、共生社会をつくるのに、少しでも貢献したいと思っている。

[参考文献]

能田昂他 (2021) 「スウェーデンにおける障害者雇用・就労支援の動向：国営企業「サムハル (Samhall AB)」への訪問調査から」『尚絅学院大学紀要』81.77-84

ストックホルム大学生との交流

担当

青木杏美花

加藤なつみ

河野有咲

渡辺幸也

ストックホルム大学交流会

青木杏美花

9月5日、ストックホルム大学にて学生たちとの交流会を行った。以下に写真と共に交流の様子を紹介する。

まず、地下鉄駅“Universitetet”で現地の学生が笑顔で私たちを迎えてくれた。その後、5つのグループに分かれ、ストックホルム大学の学生たちがキャンパスを案内してくれた。初めはお互い緊張していたものの、日本の好きなアニメや若者の流行り言葉について話していくうちに段々と打ち解けていった。スウェーデンの首都に位置するストックホルム大学は1878年に設立された。中心街から電車で数分の場所に位置し、非常に広大な Royal National City Park という自然公園に囲まれている。法政大学多摩キャンパスよりも敷地面積が広く、敷地内にカフェや学生寮などがあった。



キャンパスツアーの後は合流し、交流係によって法政大学の紹介プレゼンテーションが行われた。多摩キャンパスや日本の文化や食べ物などについて主に英語で説明を行った。現地の学生は笑顔で発表を聞いてくれていた。



プレゼンテーションの直前の交流係のメンバー

左から青木杏美花、河野有咲、加藤なつみ、渡辺幸也(体調不良のため参加はできなかったが、企画やパワーポイント作成等に携わった。)

発表の後は、皆で夜ご飯を食べた。沢山の種類のピザが用意されていたが、中でも印象的なのがケバブピザである。イタリアからやってきたピザとトルコのケバブを掛け合わせたものを「ケバブピザ」と呼び、スウェーデンで生まれたそうだ。ケバブピザにはトマトソースやチーズ、たまねぎ、ケバブ、そしてケバブソースが乗っておりとても美味しかった。スウェーデンとフィンランドでは「ザリガニパーティー (kräftskiva: クレフト・フィーバ)」という、夏にザリガニを食べながらお酒を飲むパーティーが存在する。スウェーデンに行く前に調べて知っていたが、いざ目の前にすると用水路にいるイメージだったため食べることができるか不安になったが皆で挑戦してみることにした。しかし実際はカニのような味がして想像よりも食べやすく、中にはおかわりをしている学生もいた。スウェーデンの学生たちがザリガニの食べ方を実演して説明してくれて優しさが心にしみたと同時に、家族や友達とザリガニを食べながら楽しいひと時を過ごす文化があるのはとても素敵だと感じた。



夜ご飯の後は、交流係が企画した「椅子取りゲーム」をスウェーデンや日本の有名な曲を流しながら行った。Avicii や米津玄師、ONE OK ROCK の曲をかけると、全員ノリノリでゲームに参加し、白熱した戦いとなった。(※安全性には配慮しゲームを行った。) また、ホワイトボードに知っている日本語を書いて私たちに見せてくれたり、けん玉の練習を一緒にするなど、とても楽しく有意義な時間を過ごすことが出来た。



椅子取りゲームと日本語が沢山書かれたホワイトボードの写真

交流会が始まるまでは楽しい気持ちと同時に、交流係としては場を回すことへの不安な気持ちもあったが、いざ会ってみるとすぐに打ち解けることができ、全員が笑顔で交流をしている姿を見て安堵した。日本語を履修している学生ということもあり、日本語を流暢に話せる人も多くいた。スウェーデンでは大学も授業料が無償で奨学金が充実しており、学校が8月スタートであるという点が日本と違う。同年代の学生だけではなく、結婚して社会人として働きながら大学に通っている人もいて、幅広い世代で交流をすることができ良い刺激となった。交流会の後、『ONE PIECE』のチョッパーの帽子を被っていた現地の学生が、「僕はシャイな性格で、今回勇気を出して参加したら皆が温かく迎えてくれて嬉しかったし、人間として大きく成長できた気がする。」(要約)と言ってくれた。彼と同じ班で最初にその帽子について触れ、好きな音楽を共有した私からすると涙が出るほど嬉しかった。今回、私は日本人とスウェーデンの学生の交流会という風に捉えていたが、8月に学校がスタートしたばかりの彼らからすると交流会は同じクラスの学生と交流を深める機会にもなったようだ。交流会だけで終わりではなく、彼らは次の日も学校終わりに私たちが滞在するホテルに集まり、スウェーデンの市内を案内してくれた。このような優しくて最高の友達と出会い交流することができ、改めてこの研修に参加して良かったと強く思う。



交流会の次の日、景色がよく見える展望台で撮った集合写真

個人体験記

目の前の支援が全てではないこと

藤本千世

今回、スウェーデンでは障がい者の政策について学びたいと思い、志願した。アルバイトで知的障害や自閉症を持つ子どもたちに水泳を教えていること、ソーシャルワーク実習先も知的障害や自閉症を持つ人へ生活介護事業を行っている施設で学ばせていただいたからだ。これらの経験がスウェーデンの施策を学ぶ上で実りある学びへつなげる基盤となってくれた。私は常に「目の前にいる人の“今できる支援”」を大切にしている。しかし、この考えだけでは、今後、目の前にいる人を結果的に救えなくなるのではないかと考えるきっかけになった。

私が印象に残っている施設・施策は、障がい者向け高等学校である。まず、驚いたのは内観がとてもきれいだったことだ。一步入ると、学校ではなく、カジュアルなホテルなのでは？と思うほどであった。観葉植物と照明のオレンジ色で包まれた学校は、やさしさや温かさを感じる空間づくりが施されていた。また、至る場所に大きな窓があった。大きな窓を使うことで開放的な空間が作られているのは、先生が生徒の動向がすぐにわかるのはもちろんのこと、生徒たちも開放的な空間で学ぶことができるからだ。

中でも驚いたことは高等学校の中に自動車整備、調理師になることができる設備や指導が完全に整っていることだ。知的障害や自閉症を持つ子どもたちが卒業後安定した職に就くことができるような支援を行っていることがこの学校の魅力のひとつである。実際に自動車整備を学べる教室を見学した。生徒は熱心に先生の話聞き、本物の道具を使ったり、本物のタイヤや自動車に触れたりしながら実践的に学んでいた。このような教育プログラムは企業と連携しているから行えるのだそうだ。学校で基礎的な知識を学び、3年生になると実習に行き、現場でのノウハウを学ぶそうだ。

このように、スウェーデンの障がい者向け高等学校では、卒業後に自立した生活ができるように支援者は「ルールを敷く」ことを施策として行っていた。ただ選択肢を提示し、選んでもらうだけでなく、当事者が選んだあとの道標も徹底的に行っているのだ。今後の障害者福祉は「今を尊重する」ことだけでなく、一人ひとりの「未来」にも目をやるのが大切なのではないかと考えた。

研修を終えて

松村菜々

スウェーデンについて

スウェーデンの考え方を象徴するものは、公平・平等と個人主義であると感じた。個人主義であるからこそ、自己決定や自主性、他を尊重ということにつながるのだろう。子供にも詳しく病状を説明したり、障害があっても自己決定できるような訓練をしたり、プレスクールでは、子供が興味のあることを積極的に取り入れ、幼い頃から食べるものを選択するなど、様々な場面で個人が重視されていることを感じた。

そして、市町村が多くの特権をもっており、高税金・高福祉に国民がある程度同意していることから、国民に富を分配するという平等の意識があるのではと感じた。

また、病院に入院する子どもが学校に通う子どもと同じように教育が受けられるようにしたり、特別な教育を子どもが受けるのに親の許可がいらないこと、学費が無料であることから、教育の機会を平等にすることが重要視されているように感じた。

これからについて

スウェーデンは、福祉の理想を実現している国であると感じた。講義や実習、就活を通して、日本の福祉の課題を実感してきた。また、理想を現実にする難しさを痛感してきた。だからこそ、スウェーデンという国がとても羨ましくもあり、魅力的に感じた。しかし、国の成り立ちや考え方が根本的に違うため、スウェーデンの福祉を日本の福祉にそのまま当てはめることはできない。文化や思想、歴史などを配慮した上で、日本風にアレンジすることが求められるだろう。そして、自分のできそうな、関心のある切り口を見つけて、少しでも日本を生きやすい国にしたい。変化は突然ではなく、緩やかであるが、日本も人権などの意識は変わりつつあるだろう。

また、もっと福祉を身近に感じて欲しいと思っている。福祉というものは、困った時にこそ必要であるからこそ、困っていないと遠い存在に感じることもあるだろう。もっと多くの人に福祉を自分ごとのように捉えてほしいと感じている。

そして、日本は競争社会であるが、競争社会であれば、勝者も敗者もいる。あまりに敗者に厳しい社会なのではないかを感じる。また、果たしてスタートラインは平等だろうか。貧困・障害などが理由で、生まれた時から競争の有利不利が決まっている状態であると思う。私は、障害雇用の分野で働く予定だが、少しでも公平な社会に近づくように貢献したい。

前向きに捉える病気治療

木村 優花

私は社会福祉士の実習で地域包括支援センターに行き、日本は男性高齢者が孤立しやすいという現状を学んだ。この実習がきっかけで、高齢分野に興味を持ち福祉国家ではどのような工夫がされているのかを実際に見てみたいと感じ、海外研修の参加を希望した。研修では高齢分野の視察をすることは出来なかったが、障害分野や児童分野への支援、地域の政策などについて幅広く学ぶことができ、とても充実した研修であった。

今回の研修で印象に残っていることは、小児病棟に訪問したことである。院内には遊びのセラピストがいるということに驚いた。はじめは子どもが入院生活は退屈だと感じないようにセラピストがいるのだと考えていた。しかし、その他にも医師の欲しい情報を集めるという役割があることを学んだ。病院という空間にいること、大きな病気を抱えていることで不安を抱えている子どもはたくさんいる。そんな時、遊びのセラピストと定期的に一緒に遊ぶことで、気を許すことができ本音を言うことが出来るようになるのではないかと感じた。

また、子どもに病気や治療について伝える方法はとても工夫されていると感じた。言葉だけで説明して終わりにするのではなく、ビデオを見せることやパンフレットの使用、インターネットを使用して親と子がそれぞれ理解できるようにしているとのことをお話を聞いた。治療方法についても、ぬいぐるみを患者に見立て、自分が受ける予定の治療を注射器やカテーテルなどの実際の道具を使用して行ってみることで理解を深めていることが分かった。自分がこれから受ける治療を実際にやってみることで治療が怖いという気持ちが薄れ、治療することに前向きになれるのではと感じた。日本では子どもが病気になってしまった場合は、大抵医師が親だけに病状を伝える。すると親は子どもがかわいそうだと感じ、本当の症状を伝えることを躊躇してしまう。しかしスウェーデンでは法律で自分の病気のことや成長について知る権利があると定められており、子どもの年齢は考慮する必要があるが、すべて伝えるようにしていると学んだ。病院と聞くと治療をするだけの場所というイメージが大部分を占めてしまう。しかし、スウェーデンにおいて治療はもちろん大切なことだが、入院している子にも生活習慣を大切にしてもらうようにしているというお話を聞くことが出来た。

初めて訪れる街での散策や観光、慣れない英語を使っの注文などスウェーデンでの1つひとつの出来事はとても良い経験になった。4人でお水を頼んだのに、有料の炭酸水が1人分だけきたこと、スウェーデン語のメニューでどんなパスタかわからず手探りで注文し、量が多すぎて初日から大変だったことなど視察以外にもたくさんの大切な思い出ができた。メンバーに恵まれたことで毎日たくさん笑い、FIKAを楽しみ、充実しすぎた海外研修であった。

心動かされた経験

大高達彦

従来、この海外研修は2年生を対象としたプログラムでしたが、今回はコロナ明けということもあり、3・4年生の参加が認められました。4年生になってまさかこのプログラムでスウェーデンに行くことができるとは思っていなかったのも、とても嬉しかったです。

事前学習を経て、実際に様々な機関に行ってみると、それはもう驚きばかり。大学での学びを踏まえた驚きや日本との文化や思想、考え方の違いにおける驚きなど、とにかくたくさんびっくりしました…！そのなかで、特に印象に残っている訪問場所を2つ挙げたいと思います。

まずは、行政オフィス「Stockholm city Bromma district」。自分が3年次に福祉事務所でソーシャルワーク実習をさせていただき、来年度から行政福祉の分野で働くということもあり、スウェーデンの行政福祉について気になっていました。実際に職員の方々からお話を聞いてみると、日本とのそもそもの福祉体制や役割の違い、歴史をふまえた考え方の違いを感じました。

なかでも、「役割の明確さ」を強く感じました。私は大学での授業や卒業研究のなかで、日本の福祉における役割の混乱をよく耳にしていたのもあり、こういった部分に関心を持っていましたが、スウェーデンの行政福祉におけるニーズによった担当機関の分かれ方や、その他関係機関と連携する上での分担といった部分で、分かりやすく役割が分担されているなと感じました。

2つ目は、プレスクール「Förskolan Tullstugan」。スウェーデンでは、「遊び」を通した教育に力を入れています。私自身、放課後等デイサービスで学生スタッフとして子どもたちの支援に関わらせていただいておりますが、そこでも「遊び」を通した自立支援を行っているのも、この教育方針に興味を持ちました。実際に職員の方にお話を聞き、場所を見た上で、この教育方針の意義をとっても感じました。特に、子どもたちの興味を引き出すために、様々な種類の遊具があらゆる場所に置いてある光景はよく覚えています。

プログラムの他にも、自由時間を通してたくさんスウェーデンの文化に触れました。とにかく街がのびやかで、訪問場所を含め建物や部屋が素敵！某有名家具店があるのも納得です…！いわゆるカルチャーショックもたくさんありました。気になる方は、ぜひこのプログラムに参加して、感じてみてください。

私がスウェーデンに興味を持ったのが高校1年生の頃。趣味の音楽を通じた出会いでしたが、大学で福祉を学び、このようなプログラムでスウェーデンに行くことができたのは有意義かつ忘れられない経験です。こんなに心を動かされたことはありません。

最後に、この海外研修プログラムにご尽力くださった現代福祉学部事務課の方々、エミルさんをはじめとした Swedish Quality Care の皆様、京王観光の方々、引率教員の方々、そして素敵な思い出を一緒に作ってくれた学生みんなに心から感謝します。ありがとうございました。

ありのままの自分を受け入れる国スウェーデン

青木杏美花

今回、入学前から行きたかった念願の海外研修プログラムに参加する機会を得た。そこで沢山の素敵な人と出会い福祉と向き合う充実した日々を過ごし忘れられない思い出となった。そして、スウェーデンという国のことが大好きになった。

まず、スウェーデンの街並みはどこを歩いてもいわゆる「映え」であり、ゆったりとした空気が流れていた。日本では母親と子どもが一緒にいることが多いが、現地では父親と子どもが歩いている姿をよく見かけて衝撃を受けた。また、先輩方は移動中にも自身のソーシャルワーク実習の経験から福祉について活発に意見交換をしていた。私はその姿を見て、表面的ではなく福祉の本質を捉え自分なりの考えが持てる人間になりたいと思った。

プレスクールや小学校、小児病棟など様々な施設を訪れたのだが、どの施設でも必ず「質問があったら話の途中であっても遠慮なく聞いてくださいね。」と何度も言ってくださりその優しさに感動した。そして話を聞く中で、スウェーデンでは税金が高い分福祉へのお金が十分にあるからこそ一人一人と向き合い、多職種で連携するシステムが整っているのだと思った。また、話を聞く中で「過程」や「法律」を大切にし、「誰1人として置いていかず、みんなが笑顔で幸せに暮らせるような仕組み」が整っていると知り、この国で暮らしたら幸せそうだった。実際、2022年の世界幸福度調査で7位という高い幸福度を誇るスウェーデンだが、その一方で季節性情動障害である SAD という冬のうつ病に苦しむ人も多くいることを知り驚いた。

特に印象的なのはストックホルム大学での交流である。交流係として法政大学の紹介プレゼンを英語で行うのは緊張したが現地の学生が笑顔で発表を聞いてくれた。その後の椅子取りゲームやけん玉についても「楽しかった！」という声が沢山あがり安堵した。次の日、仲良くなった学生たちがスウェーデンを案内するために沢山集まってくれて嬉しかった。そして帰国後も SNS で連絡をとる仲になり、再会の約束をすることができた。

スウェーデンでは FIKA というお茶をする文化があり、チョコやフルーツなどを食べながらリラックスして話せる時間は魅力的で日本にも FIKA があれば良いなと思った。また、私がスウェーデンに関わった人は容姿ではなくその人自身を見ていて、沢山言葉やハグで自分の気持ちを素直に伝えてくれるため自己肯定感とスウェーデンへの愛の気持ちが高まった。

事務課や学校の先生方、京王観光の方や通訳してくださったエミルさん、家族、施設の方々、一緒にスウェーデンに行った最高の仲間たち、そして現地の素敵な友達のおかげで学びが沢山の充実した日々を過ごすことができ、感謝の気持ちでいっぱいだ。Tack så mycket!

またとない機会

加藤なつみ

夜は気づいたら朝になってしまうほど疲れて眠ってしまうくらい、どの日も刺激が強く学びの多い1週間だった。元々ヨーロッパが好きで、北欧にもいつか行ってみたかった。とはいえスウェーデンは個人の旅行ではなかなか行きづらいイメージがあった。さらに、もし旅行でスウェーデンに訪れたとしても、福祉についてこんなにじっくり学ぶことはできないだろう。現地で福祉制度を学ぶことができるなんてまたとない機会だと思い、海外研修への参加を決めた。

多くの施設を視察したりさまざまな人と出会ったりしたが、特に印象的だった日がある。それはストックホルム大学を訪れ、ストックホルム大学の学生に構内を案内してもらったときのことだ。それぞれの大学のことや、日常のことなどさまざまな話題を共通言語である英語で話しながら歩いた。英語がなかなか伝わらず難しいこともあったが、それでもお互いに汲み取ってコミュニケーションを取ったことは楽しかったし、初めて会った他の国の人もこんなに話せるんだと自信にもなった。夜には、交流会企画を担当した私たちの班が事前に用意したゲームをしたり、日本から買ってきたお土産を渡したりして交流を深めた。そうして私たち法政大学の学生とストックホルム大学の学生は別の日にも一緒にご飯を食べたり、ストックホルムの街を案内してもらったりして思い出が多く増えた。

また、私は以前から女性の社会進出に興味があり、スウェーデンはジェンダーギャップ指数ランキングで長年上位であるとのことで現地の方とこれについて話そうと考えていた。そして機会があり実際にストックホルム大学の学生に聞いてみたところ、女性管理職の割合は、公表されている数字だけでなく体感にしてもやはり日本より多いそうだった。さらに、男性も育児休暇を取るのが当たり前で、女性も働きやすい環境が整っていて一人一人の権利が充実しているとのことだった。ランキングのようなデータでも示されているように、国民自身も実感しているということを生の声で聞いたのは貴重な経験だった。

このように、スウェーデンは社会的な制度だけでなく権利の面でも充実していることがわかった。海外研修を通して、私は異文化に触れてコミュニケーションを取る経験や、スウェーデンという社会福祉的に進んでいる国を自分の目で見て確かめられたという経験をすることができた。大学での学び以外にも、今後社会に出て働くとなったときにも今回の経験を活かしたい。

スウェーデン研修に行って

衛藤和瑚

私がスウェーデンの研修先で 1 番印象に残っているのは、小児病棟である。スウェーデンの小児病棟では、治療や手術前に自分の身体にどういったことが起きるのかを人形や注射器などの医療器具のレプリカのようなものを使って、体験することができる。そうすることで、体験しながら子どもたちは自分の病気について知ることができる。また、事前に知っておくことで、病気や治療に対する恐怖や不安が減るのではないかと感じた。日本では子どもを怖がらせないために病気のことを隠したりするイメージがあったので、スウェーデンの小児科を訪れて、日本との考え方の違いを実感した。子どもだからといって、病気について隠したりするのではなく、子どもの知る権利を守り、病気について理解してもらうという考え方はすごくいいなと思った。

ストックホルム大学の学生との交流もとても印象に残っている。私は英語に苦手意識があったので、学生との交流は少し不安だった。しかし、海外の学生と交流する機会はなかなかないので頑張って話してみようと思い、簡単な英語で話しかけてみたらみんな気さくに話してくれた。日本の観光地や和食、アニメや漫画などについて話したりした。日本のアニメや漫画が好きな方が多く、日本人である私よりも詳しくだったので驚いた。もっと日本の文化などについて知っておくべきだったと感じた。またコミュニケーションは取れたものの、話したい言葉がすぐに英語で出てこない場面が何度もあり悔しかったので、これから特にリスニングやスピーキング力を鍛えたいと思った。

私にとって初めての海外だったので、不安もあったが、とても楽しくあっという間だった。また、機会があればスウェーデンに訪れたい。

個人体験記

亀田萌葉

私はこの海外研修で初めて飛行機に乗って初めて海外に行きました。ずっと行きたいと思っていた国だったので不安よりもワクワクがいっぱいでした。スウェーデンについた瞬間から日本とは全然違う空気の綺麗さにこんなに違うものなのかと驚きました。研修で会う人全員とても暖かくてゆったりしていて私もこのくらい心と時間に余裕を持って生活したいと思いました。一番初めの研修で「fika」を体験してお菓子を食べる時間があるんだ、食べながら仕事をするのはコミュニケーションも取れる！と思いました。帰る頃には fika をしないと、と思うほど fika という文化が好きになりました。街中でベビーカーを押したり子供を連れている人がほとんど全員と言っていいほど高い確率でお父さんで、育児休暇などの制度が進んでいることを実感させられました。街の建物もすごく歴史的で本当に魔法の宅急便の世界に入ったような気になりました。

現地の大学生との交流会で初めて食べたザリガニは予想よりも美味しかったのですが、エミルさんのザリガニ愛には圧倒されました。私がスウェーデンで食べた中で一番好きなものは交流会で食べたケバブピザです！あるようでない味がすごく美味しくてたくさん食べてしまいました笑

その次の日に現地の大学生に連れて行ってもらったストックホルムを一望できる場所は本当に本当に美しくても思い出します。

そしてスウェーデンといたら IKEA！ということで本店に行ってみることにしたのですが、最寄駅からのバスを乗り間違えて危なさそうな何もない道で降りて道ゆく人に初めてみるハンドサインを出され帰りは電車も乗り間違えて、とすごく焦る体験もしました笑 その経験の後にみる「Odenplan」の文字の安心感はすごかったです。

現地で友人にももらったリコリスのグミは本当に口に合わなかったですが、そんなことも忘れるくらい友人と過ごすスウェーデンが楽しかったです！

初めてで溢れていた海外研修は私の人生にとってとても大切な経験になりました。

スウェーデン研修を通して

長尾紗希

私がこの研修に参加しようと思ったきっかけは、この機会を逃したらスウェーデンには自分では行かないだろうな、行ってみたいなのというとても些細なことでした。将来に明確なやりたいことがあるわけではない私は、この研修に行ったら少しでも手掛かりが見つかるのではないかなと期待もして、事前レポートを書いていました。結果、参加できることになり、学んだ点が1点と今後に生かしたい、改善したい点が1点あります。

学んだ点は、スウェーデンの福祉の豊かさについてです。日本とはるかに違う点が多くありました。プレスクールや行政でのアルコール依存症の支援・子供支援、ハビリテーションセンターなどさまざまな方面に発展していました。特に私が印象に残っているのは、小児病棟です。小児病棟では、図書館から院内学級まであり、入院している子供たちがどんな子供でも分かるように、そして多くの場合が1対1で勉強をしていて、その子一人ひとりにあった進度で行っていました。この状況を学校の先生に伝えていて、学校との連携も取れていました。また、年齢によって分かれたクラスもあり、その年齢に応じた特徴のあるスヌーズレンルームやウォーターベッドがありました。1～12歳の子供たちが人形を使って自分が受ける治療について説明をすることがとても画期的だなと思いました。自分がどのような治療を受けるか理解することが難しい年齢でも、このように分かりやすく説明をしてくれたら信頼することができ、少しでも不安が減ると思うので、日本でも取り入れてほしいと思いました。

今後に生かしたい、改善したい点は、自分から行動する点です。現地の大学生と交流するときに私は、自分の英語力に自信がなく自分から進んで話しかけ、行動することが少なかったです。そんな時に先輩方や周りの仲間が話を振ってくれたおかげで少しずつ話そうことができるようになりました。次の日の食事の場では、前日よりも慣れることができたおかげで、話を広げることができるようになりました。しかし、全体を通して自分から行動するというよりも、「誰かに助けられて」出来るようになることが多かったです。今後の人生で自分から行動しないとチャンスを逃したりすることが多くなると考えています。今回の研修でも自分から話しかけ行動していた人たちの方がとても楽しそうに交流していました。自信がないからと理由をつけて行動しないのではなく、まずは結果を気にせずに自分から行動していきたいです。

私は、この研修が終わって2か月が経った今でも本当に行って良かったなと思います。誰かと一緒に行こうと約束をして出したわけではなかったのですが、友達がいるかどうか、出来るかどうかとても不安だったけれど、仲良くなれて自由行動の時間もとても充実していました。今まで将来のことについて考えていなかった私ですが、研修の後履修を組み直し、一時期諦めかけていた資格を目指すきっかけにこの研修がなりました。今は、たくさんの授業で多くの知識を必死に吸収していますが、この知識がもっと増えたときこの研修を思い出して、照らし合わせ、もっと学びを深めていきたいです。

忘れられないスウェーデンでの1週間

山田光理

スウェーデンの福祉・心理についての学びを通して、スウェーデンには誰でもどんな人でも自分で判断し、物事を決める権利があるという考え方が根付いていることを実感しました。例えば、視察先の小児病棟では、子供に対しても大人と同様にどのような治療法があるのか、どのような治療を受けるのかをぬいぐるみを用いて、丁寧に説明することがわかりました。これは子供が不安にならないようにするためであると同時に、厳しい現実でも年齢等を考慮した上でできる限り伝え、抱えている病気に対する正確な知識を持ってもらうためでもとおっしゃっていました。これは大人と同様に子供も自分のことを知る権利、自分のことを決める権利を持っているという考えが根付いているからだと感じました。そして、この点に関して日本とは異なる点であると感じ、子供も対等に扱い、子供が理解できどうかに関わらず、少しでも理解できるように試みるという取り組みに対して取り入れるべき点であると感じました。さらに、ハビリテーションセンターではカウンセラーと臨床心理士の違いに関して、カウンセラーはソーシャルワーカーと似ていて、社会の中にどのような支援があるか調べ、紹介し、患者を取り巻く人間関係、環境、状況を整えていく役割があるのに対して、臨床心理士は患者の心理的な問題に関する相談を聞いて、心理的支援を行う役割があると知り、この2つの職種に違いがあることに驚きました。このように多くのことを学ぶとともに、観光地巡り、現地の学生との交流などスウェーデンでの楽しい思い出もたくさん作ることができました。北欧の国なので、海鮮がとても美味しかったのですが、訪れた寿司バーで醤油の中に虫がたくさん入っていたことは衝撃的で忘れられません（笑）。私にとってこのスウェーデン海外研修が初めての海外となり、見るものすべてが新鮮でした。スウェーデンで過ごした1週間はなぜか日本よりも時間がゆったり流れているように感じ、まだ帰りたくないと思うほど居心地がとてもよかったです。また行きたーい！！

海外研修で学んだスウェーデンと日本の福祉の違い

田村梨乃

私は、スウェーデン海外研修で学んだ、スウェーデンと日本の違いについて2つ挙げる。

1つ目は、臨床心理士の療法の違いである。私は研修最終日に訪れた研修先の臨床心理士に聞いた話で、スウェーデンでは臨床心理士がクライアントと電話で連絡を取ることが可能となっていると知り驚いた。日本では、臨床心理士がクライアントと個人的に会ったり連絡を取ったりすることは、二重関係に発展することからタブーとされていると伝えたと研修先の臨床心理士の方は、「依存を恐れて仕事外だからと言って連絡を絶ってしまうと誰も助けられない」と述べていた。スウェーデンと日本は国民性が似ているが、クライアントへの対応は真逆なため、とても面白いと思った。

2つ目は、障害者と健常者の関係性の違いである。スウェーデンでは一般の集合住宅の中に障害者が暮らす階が存在するが、そのことに関して市民住民からクレームが来ることはないという。日本で同じような集合住宅を建てようとする、クレームが来るのではないだろうか。また、日本の障害者手帳のような障害の程度について分けて視覚化するものに対して、スウェーデンの障害者福祉に携わる人は、「日本ははっきりと障害者だと区別するという印象がある」と述べていた。このことから私は、障害者手帳に関しては障害者が公共交通機関の割引などを受けることができ、強制で発行するものではないため便利なものだと考える一方で、集合住宅の話聞き、やはり日本では障害者と健常者との間に壁があると思った。

今回、私は高福祉で知られるスウェーデンに行き日本との様々な違いを見つけたが、スウェーデンと日本どちらの方が総合的に良い国かと考えると、はっきりこちらの方が良いと決めるのは難しいと感じた。しかし、福祉の面ではスウェーデンの方が、障害者など支援が必要なマイノリティの人が暮らしやすいという印象を受けた。私は、スウェーデンと日本は遠い国同士だが、お互いに影響を与えながらそれぞれの良い部分が取り入れられると良いと思った。

個人体験記

清水のどか

今回のスウェーデンは私の人生の中でも、本当に強く素晴らしい思い出として残るものでした。とても濃密で楽しい1週間だったので書ききれないのですが、できるだけ最高の経験だったことが伝わればいいなと思います。

スウェーデンでは、驚きや感動の連続でした。

私たちが泊まったところは少し都会から離れたところで古い町並みが綺麗に残されていて、すごく開放的で心地が良かったのを覚えています。

初日の夜は、素敵なレストランで複数人で夕飯を頂きました。さすが海外という感じで、量が多い！というのが第一印象です。料理もですが、なによりもお店の店員さん、つまり現地の人とコミュニケーションが取れたのが嬉しかったです。つたない英語と少し前にスマホで調べたスウェーデン語の「ありがとう」だけでしたが、異なる国の人とコミュニケーションを取れた嬉しさを感じて本当に幸せでした。コミュニケーションと言えば、この研修で一番思い出に残っているのはもしかしたらスウェーデン大学の学生との交流かもしれません。今回なんと学生との交流が二日間もできまして、1日目はスウェーデン大学の構内見学とオフィスでのレク、二日目が夕方から街案内や夕飯をみんなで食べに行ったりしました。最初はちゃんとコミュニケーションが取れるかすごく不安でしたが、学生の中にとっても日本語が上手な人がいたり、考えながら話してしまうのでとてもゆっくりでも拙い英語を聞いてくれる皆さん本当に優しい方々で私が思っていた以上にたくさんお話することができました！！本当に本当に楽しかったです。二日目のフードコートで夕飯を食べるとき、周り全員スウェーデンの学生さんで話を聞いてついていくのがやっとでしたが色々な面白い話を聞いて楽しかったです！でも、もっと英語を話せるようになっていたら、単調な受け答えではなくこちらから日本について教えたり、どんどん詳しくスウェーデンやその人個人について聞いたりできたのかなと、とても悔しい思いも同時にしました。

あとは、自由観光の日がとても最高でした。スウェーデン王室について知る機会にもなり、お土産の買い物やおいしいごはん屋さんに行ったり、初めての土地でたくさんチャレンジができたと思います。また、その日、頑張って地下鉄やバスを駆使してたくさん巡ろうとしてたのですが、迷ったり間違えたりして暗い中街はずれの方まで行ってしまったのもとてもいい思い出です。たくさん笑いました。

本当にいい経験をしたと思います。絶対に忘れない貴重で大切な思い出となりました。

個人の体験記

中村優光

私にとってこの海外研修は、海外の福祉や文化を学ぶだけでなく新しいことへの挑戦の機会でもあり、とても有意義で貴重な体験になった。大学に入る前までの自分はとても内向的で、新しいことにチャレンジすることやいつもと異なる環境に自分から踏み込むことが得意ではなかった。しかし大学での様々な人とのかかわりや勉強を通して、もっと福祉や心理について学びたい気持ちに加え新しいことに挑戦したいと思うようになり、海外研修への参加を決めた。スウェーデンで過ごした一週間は想像以上に楽しく刺激的で、忘れられない思い出になっている。

現地では施設を見学しながら様々なお話を聞くことで、スウェーデンの福祉について多くの学びを得られた。日本とスウェーデンの福祉制度の違いには、その背景にある歴史や文化、考え方の違いが大きく影響していると感じる。特に印象的だったのは、スウェーデンでは小さいころからインクルージョンや権利、平等などについて考える機会が多いということだ。小さいころからのそのような習慣が、スウェーデンの先進的な福祉制度やインクルーシブ社会の実現を可能にしているのだと感じられた。それらの良いところを取り入れつつ、日本では自分たちの文化や習慣に合わせて考える必要があると考えた。また、現地の人との交流も私にとって挑戦の一つであり、英語に自信はなかったが積極的に自分からコミュニケーションをとるようにした。その結果、想像以上に交流を楽しむことが出来たと同時に、もっと英語を勉強して話せるようになりたいという意欲も生まれた。研修以外の自由行動の時間でも、海外研修をきっかけに仲良くなった仲間と一緒にスウェーデンの綺麗な景色や建築物、食べ物を満喫することができ、沢山の楽しい思い出を作れた。

この海外研修は私の人生において大きな出来事で、非常に意味のあるものになったと思う。異なる環境や文化を知ることで自らの視野が広がり、成長を実感できた。この経験をウェルビーイングの向上に役立て、将来に活かしていきたい。

スウェーデン研修 個人体験記

高松さつき

特に印象に残った思い出 2 つについて書きたいと思います。

まず、1 つは衛生観念が日本とはかなり違ったことです。私たちが今から食べようというお肉に店員さんが指でムニムニ触りながらやわらかいことをニコニコ笑顔で伝えてきたり、お寿司屋さんに行ったときにお醤油の中にコバエがたくさん浮いていたり、日本では衛生的にありえないことがたくさんあるので福祉制度だけでなく、ぜひそういうことも含めて文化の違いを楽しんできてください。あとご飯を食べる際、スウェーデンの1人前が日本2人前のボリューム感でくるのでごはんを外で頼むときは注意したほうがいいです！

2 つ目はスウェーデン研修を通して新しい友達ができたことです。約 1 週間と大変短い期間ではありますが、遠い異国の地で色々なところへ一緒に行き、様々なハプニングを一緒に乗り越えていく中でとても絆が深まったと思います。日本に帰って来た時には1週間前ほぼ初めましてだった思えないくらい仲良くなっているはずです。スウェーデンの研修に行っていなければ接点もなかったであろう友達(同じ班の子たち)と帰国後月1でご飯に行くくらい仲良くなれたこと、またこの貴重な経験を共有できる人ができたのはとてもかけがえのないことだと思います。私はスウェーデンでの学びや思い出と同じくらい新しく素敵な友達が増えたことが研修に参加してよかったことの1つだなと感じました。

それから余談にはなりますが、行ってから気づいたことで次行かれる方にはぜひスウェーデンの制度だけでなく日本の制度についても調べといた方がいいよということをお伝えしたいです。現地の訪問先でいろいろな質問をするにあたって、そういえば日本はこの場合の福祉制度はどうだったんだろう...?と思うことが多く、スウェーデンの福祉制度と比較するには日本の福祉制度をもっと調べておくべきだったと感じました。なので、行く前に事前学習があると思うのですが、ぜひスウェーデンの事だけでなく日本の福祉制度についても少し詳しく調べておくことをお勧めします。

最後になりますが、引率の先生方、エミルさん、東京観光や事務課の方々のおかげでとても安全で楽しい研修になりました。本当にありがとうございました。

スウェーデンと日本の文化の違い

北久保諒美

私は今回の海外研修に参加するまで海外に行った経験が無く、日本語が通じない土地に行くことが非常に不安だったため、募集期限のギリギリまで応募するか悩んでいましたし、飛行機に10時間以上も座っているのが辛くて途中で参加したことを後悔もしました。ですが、今はスウェーデン研修に参加してみて本当によかったなと思います。スウェーデンに着いて一番思ったのが、「絵本に出てくるような世界は実在するのだな」ということです。街中にたくさんあるアパートですら一つ一つが日本とは全く違い、おしゃれでどこを撮っても絵になりました。古くからの教会やお城もとても綺麗で、教科書の中に出てくるような建造物が実際目の前にあることに感動しました。

また、文化面で日本との違いを強く感じたのは育児に対する男性のかかわり方です。最近では日本でも男性が一人で子どもを連れてレストランに来ていたり、ベビーカーを引いて歩いていたりする場面をよく見かけるようになりましたが、スウェーデンではよりその比率が高かったように感じました。また、若い男性だけでなく、プレスクールの見学の際には高齢の男性が孫のお迎えに来ていて、社会全体に子どもは皆で育てるもの、という意識が浸透しているように思いました。日本で未だに子育ての主軸が女性に置かれがちなのは、男性の意識の問題だけというわけではなく、社会の仕組みの問題も大きいと思います。スウェーデンでは男女ともに育休の取得が義務付けられており、取得しなかった場合には罰則もあります。会社の中で育休を取得する人がいれば代わりに臨時の社員を雇うことが普通です。日本も今男性の育休取得を推進していますが、育休を取る人がいると、その人の分の仕事まで他の社員が負担しなければならない会社が非常に多いです。その結果として育休を取る人は迷惑、といった風潮もあります。育休取得率、という見かけだけの数字に囚われるのではなく、育休を取得することで必ず生じる人員不足、といった問題にどう対処していくのかも考えることが真に子育てのしやすい社会を作るために必要なことなのではないかと思います。

スウェーデン研修を終えて

石井莉愛

今回生まれて初めて降り立ったスウェーデン。そもそも私がこの研修に参加した理由は何なのかと言うと、好きなアーティストの作品の舞台がスウェーデンでいつか絶対に行きたいと高校生の時から思っており、そしてその想いを抱えながら受けた付属校説明会で、現代福祉学部ではスウェーデン研修があるという話を聞き一瞬で心がときめいたのである。ただ、近年世の中をざわつかせていた新型コロナウイルスの影響もあり、大学在学中に無事に開催されるのか、もしかしたらないのではないかという不安も多くあった。だが、今回例年通りの2年生だけでなく、前年度行けなかった3,4年生も織り交ぜた新しい構成での研修旅行再開が決まったメールを見た時には思わずカッツポーズをした。結論、心の底からこの研修旅行に行けて良かったと思っている。

研修では、スウェーデンの街並み、現地の方との会話、施設訪問、学生との交流などの全てから学ぶことがたくさんあった。スウェーデンの街並みは、何と言っても色合いが美しく、昔ながらの芸術的な建築物が今もなおそのままの風景として大切に残されていて、つい吸い込まれるような美しい湖とアーティストックに統一された街並みの相性には息を呑むほど感動した。そして、街の散策中時折現地の方と話す機会があったのだが、皆気さくに話しかけてくれ、おすすめの場所なども丁寧に教えてくれた。とても温かい人たちだと思った。連日様々な施設を訪れたが、中でも心理学科として興味を持ったのが、スウェーデンの自治体が運営する子どもを対象とした医療センターDBT チームの臨床心理士さんの話だった。日本ではあまり普及されていない弁証法的行動療法を専門的に行なっている場で、個々の症状に合った支援、治療ができるよう一つのものに特化した施設があることに感銘を受けたと同時に充実している印象を受けた。また、そのDBTという支援策について日本に帰ってから専門演習にて自分で調べたこと、スウェーデンで学んだことについて発表もし、事後学習をしたことでさらに理解が深まった。学生との交流では、ストックホルム大学の学生はとても熱心に日本語を学習している印象を受けた。はじめましてから打ち解けるまでの時間は早く、交流をきっかけに仲良くなり、日本に帰ってからも連絡を取り続ける友人もできた。自分にとっての人生の転機であったと実感している。

以上を踏まえて、本研修旅行はとても充実した約1週間となった。この短い期間では回ることのできなかつた場所がたくさんあるため、来年再びスウェーデンを訪れ、向こうにいる友人と好きなアーティストの聖地巡礼できたらいいなと密かに計画を練っている。また、いつかは住みたい場所でもある。新しい価値観との出会い、スウェーデンの Fika 文化、国を超えた交友関係、人柄、働き方など、どれをとってもスウェーデンの良さが詰まっており、魅力満載の素敵な国であることを身をもって知る幸せいっぱいの研修旅行だった。

初海外体験記

河野有咲

私が今回渡航しようと思った最大の理由としては、高校時代に学校で企画されていた、カナダと台湾への国際交流プログラムがコロナにより中止になってしまったことのリベンジとして、という意味付けが大きい。もちろんそれらの交流プログラムでも、現地の方がオンライン上で講座を開いてくれたり、現地の学生と英字新聞を送りあったり、などといった形で学びはあった。しかし、「座学で学んだことと、現地で視察したこととはどれだけ違うのか」という疑問は残ってしまった。

では、今回視察に行ってみて、その疑問に対する自分の答えはようになったか。

結論としては、「驚くほど印象が変わることはない。しかし視察の価値はある」という考えに至った。

全くもって印象が変わらないかと言ったらそれは違う。例えば、ストックホルム大学の学生の一人は、「高校は教師の質は最悪だった。」と述べていた。(理由はあんまり聞き取れなかった上に、聞き取れていた部分もなんて言っていたのかは忘れました。ごめんなさい。)もちろん、一人の意見がその国の民意を表しているわけではないが、「スウェーデンの教育ってどこも質がよさそう」と思っていた自分からしたら衝撃である。こういう意見を聞けることは、現地視察として、とても意義のあることだと感じた。

ただし、どこでもこのような否定的な意見が見られるわけではない。今回視察で見て、学んだ所はどこも、設備が整っていて、「さすが福祉国家。事前に学んでいたときに想像していた通りだ。」と感じたのも事実である。

しかしながら、これらの事実を踏まえた上で、やはり、このような視察プログラムに組み込まれている程だから、スウェーデンの中でも成功しているところしかないのでは、という個人的な疑問もある。これ以上は、移住して、子どもを育ててみて…とやらないと分からない面もあるのかな、と思った。

ただ、全体的な印象は変わらなかったとはいえ、やはり、座学と実際に見学するのでは、実感として違うので、視察に行ってみて良かったなと思った。

引率教員・事務課より

コロナ禍明けの海外研修を終えて

引率教員 図司 直也

コロナ禍明けの海外研修を無事終えることができ、安堵しています。学部の顔でもある海外研修のプログラムをどう再開させるか、先生方や事務課の皆さんと本当に頭を悩ませました。今期の募集は、渡航を中断した学年も含め、2年生から4年生までを対象とし、1団最大30名の2団体制で組み立てたものの、航空運賃の高騰や円安による現地の物価高から、費用も例年以上の見積もりとなり、最小催行人数を上回るだけの応募があるか、ひたすら心配しました。結果的には、ギリギリの人数で参加申し込みがあり、私が担当した第2団は18人で結成でき、無事催行となった次第です（最終的に体調不良で1名欠席し、一緒に行けなかったのは本当に残念です）。

今期のプログラムでの新たな試みが、「公共交通機関を利用した現地移動」でした。私の海外研修引率は今回が2回目で、前は現福着任まもない2008年に、語学担当の石川郁二先生とご一緒させて頂きました。その折は、現地移動には貸切バスを利用し、引率教員としてもまとまった移動ができ気は楽だったものの、バスの車中では疲れから寝ている学生も多く、お膳立てされて受け身になってしまう行程もどうか、という話も出ていました。それもあって、今回は、コスト切り下げの側面もありましたが、現地の暮らしに触れる機会を増やす意味でも、現地移動に公共交通機関を使ってみるという案が出されました。安全管理面では慎重に検討して実施に踏み切りましたが、結果として、研修全体がより充実した内容になった感があります。

その要因に、スマートフォンの存在が大きかったと言えます。ストックホルムの地下鉄、バス、トラム、郊外電車は、SL (Stockholms Lokaltrafik) が一括して運営し、そのアプリで7日間のチケットを購入すれば、毎回QRコードをかざすだけで利用でき、切符の購入が一切不要だったこと。また、位置情報をもとに、このSLアプリで乗換案内も検索でき、Googleマップで自分の居場所を確認しながら、学生自身が主体的に移動できたことが挙げられます。実際に、研修初日に全員で行動しながら使い方をマスターしてしまえば、その日以降、研修を終えた夕方には、各自のペースで寄り道しながらホテルに戻ってくるようになり、自由行動日やスウェーデン大学の学生との交流でも、様々なところに出向いて、行動範囲がかなり広がり、ストックホルムに暮らす人たちの様子にも触れられたようです。何より、ストックホルム滞在中にはかなりの距離を歩くことになり、健康的に過ごせました。

最後に、多くの皆さんの支えがあって、円滑に第2団の研修を実現できたことを、改めて感謝申し上げます。第2団の引率教員として、当初、野田岳仁先生とご一緒する予定で、事前学習など学生へのフォローも丁寧に進めて頂いたのですが、ご体調のことで急遽交代となったのは残念でした。また、ピンチヒッターとなった小田友理恵先生には、参加学生と丁寧なコミュニケーションを図って頂き、体調不良の学生への気遣いでは大変助かりました。

し、夕食やオフタイムでのまち歩きでは楽しい時間を過ごすことができました。そして、添乗頂いた京王観光の長谷さん、小浦さんには、先の公共交通機関での移動をはじめ、研修の遂行にしっかりサポート頂きました。SQC のエミルさん、高橋さんにも、現地研修先との交渉、セッティングでは、コロナ禍明けの調整で相当ご苦勞をお掛けしたと察しております。個人的には、2008 年の前回研修時にお世話になった長谷さん、エミルさんと、今回再びご一緒でき、ストックホルムでもオープンテラスでビールを飲み交わせたことがとても嬉しかったですし、小浦さん、高橋さんのような新たなスタッフの皆さんとの出会いから、新たな展開も生まれそうで今後も楽しみになりました。

第2団は、2年生から4年生まで、福コミ、臨床心理両学科が入り混じった混成部隊でしたが、上級生が明るく、また就職先を見据えた問題関心から堅実な学びの雰囲気を作ってくれて、下級生もそれに刺激を受けながら積極的に質問を出していたところが印象的でした。参加学生の皆さんにとって、この経験を後々まで役立ててもらえれば我々引率教員も頑張った甲斐があります。皆さんの今後の活躍も大いに期待しています。

現代福祉学部の海外研修に参加して

引率教員 小田 友理恵

4年ぶりの現代福祉学部の海外研修は、2年生から4年生の異なる学年の学生が参加し、2団に分かれての実施となりました。私はB団の引率教員として参加することとなりました。新型コロナウイルスの蔓延や不安定な世界情勢など、ここ数年、当たり前の日常が当たり前でなくなる様を目の当たりにしたこともあり、とにかく皆で無事に行って帰って来られることを祈り、緊張しながら羽田空港に集合したのを覚えています。幸い終日お天気にも恵まれ、小さなトラブルは互いに力を合わせてカバーして、全日程を終えることができました。研修中には真剣な眼差しで学び、自由時間にはのびのびと楽しむ学生の様子を見て、とても頼もしく、誇らしい気持ちになっていました。情報が溺れるほどに溢れる時代ではありますが、福祉先進国と呼ばれるスウェーデンの行政・医療・教育の諸機関に実際に訪問して、そこで働く人々にあたたかく出迎えていただき（Fikaのおもてなしまでいただくことも！）、お人柄に触れながら専門性の高いお話を直にお伺いできることは、本当に稀有な機会だと身に沁みました。

私自身、専門としている臨床心理に関して多くのことを学ばせていただきました。スウェーデンの福祉・教育・医療における心理職および心理的支援を行う福祉職の多岐に渡る活躍、他職種連携のネットワークの広さと機動力に驚くばかりでした。子ども、大人、障がいのある人、障害のない人、あらゆる人々の基本的な人権を尊重する意識や姿勢が当たり前のように浸透していることを、お話の端々から感じ取ることができました。

しかし、「スウェーデンって素晴らしい」「良い学びを得た」というように安易に完結しないところが、現代福祉学部の海外研修ならではの思いでした。「スウェーデンの素晴らしい文化や取り組みに直に触れて圧倒されたが、日本に良いところを取り入れるためにはどうしたら良いのだろう。その障壁はなんだろう。どこから手をつければ良いのだろう。」自分の体験や学びをこれからの社会に活かすため、自分自身の進路や生活とも結びつけながら真剣に悩み考えていたある学生の言葉と姿が忘れられません。海外研修でのたくさんの体験や学びを携えて、参加した学生が、福祉や心理の領域に限らずさまざまな領域で活躍していつてくれることを心から期待しています。私も負けずに頑張りたいと思います。

海外研修は、これまでに参加してきた学生、携わってきた教職員、関係者の方々がリレーのように繋いできた現代福祉学部の貴重な財産だと気づき、今回そのリレーに加われたことに心から感謝申し上げます。充実した研修をアレンジしてくださったSQCの皆さま、エミルさん、京王観光の長谷さん、小浦さん、準備を整えてくださった事務課の皆さま、アドバイスをくださったA団引率の伊藤先生、望月先生、B団引率の図司先生、関係者の皆様のご尽力と手厚いサポートを、異国の地でひしひしと感じていました。本当にありがとうございました。

2023 年度現代福祉学部海外研修に寄せて

法政大学現代福祉学部事務課 釜野 祥太郎

2023 年度海外研修参加者の皆さん、事前学習から現地視察、そして報告書の作成までの長きにわたる研修、大変お疲れ様でした。第 1 回事前ガイダンスで初めて皆さんにお会いして以来約はや 6 か月、長いようで短いこの期間は私にとっても大変貴重な時間でした。

今年度の海外研修は、新型コロナウイルス感染症の影響により 2019 年以来 4 年ぶりの開催でした。4 年というのは若い皆さんにとってはもちろん、現代福祉学部にとっても非常に大きな空白期間でした。事務課の職員の中でも過去の研修や経緯を知る者は殆どいなくなってしまうため、資料や報告書を引っ張り出しては読み返し、また元職員や当時引率をしていた旅行会社の担当の方にお話を伺い、手探りで悪戦苦闘しながら企画・運営するといった状況でした。そのせいで私からの案内や事前ガイダンスの内容等、ふわふわと心もとない部分が多分にあったかと思います。その点についてはお詫びの言葉もないのですが、そうした状況でも、参加者同士でコミュニケーションを取りながら与えられた課題や割り振られた役割を懸命こなしていく様子を見て、その積極性や行動力が頼もしく感じたのが大変印象深かったです。そして、私自身も前向きに生き生きと活動される皆さんを見たことで、その前向きな姿勢にとっても身が引き締まる思いをさせていただきました。

今回の海外研修ではコロナ禍の影響もあってか、海外渡航が初めての方が多くいらっしゃいました。私自身、初めての海外旅行は大学 2 年生の時にニューヨークを訪れた時でした。それ以降多くの国を訪れましたが、いまでも最初の旅行は大変印象深く残っています。テレビや本でしか見たことのない異国の地を初めて訪れた感動と興奮、日本と全く異なる環境に出会った新鮮な気持ち、そして慣れない土地での不安と緊張のすべてが忘れられない思い出として、15 年以上たった今でも私の人生に息づいています。今回は福祉や心理、まちづくりといった皆さんが日々キャンパスで学んでいる専門知識を更に深化させることを目的とした研修ではありましたが、研修先の学びだけでなく、ホテルでの生活や現地の鉄道に乗っての移動、買い物の際の会話などスウェーデンで過ごした全てのことが皆さんの人生にとって価値ある経験となっていたら幸いです。











